



SAMAËL AUN WEOR

ノーシスについて日本の読者へ

ノーシスは宇宙の創造とともにある

「ノーシス」(Gnosis)の語源はギリシヤ語で、「知ること、知識」を意味する。知識といっても、表面的、一般的なものではなく、深い知識、叡智をさす。あるいは「直観的認識力」と言ってもよい。すなわち頭インテリクの知識やアカデミックな知識でなく、ハートの知識、心に根ざす知識と言えよう。さらに別の言葉で表わせば、物質開発のための知識ではなく、知性インテリジェンスと意識コンセンサスを開発するための知識である。

ノーシスは人類と同じほどの古い歴史を持つ。宇宙の創造自身が、ノーシス(叡智)なくしてはできなかったからである。ノーシスの起源は創造主の女性的見地であり、この永遠なる二元性をもとに、全宇宙や自然、叡智が生成されたのである。

すべての古代文明はこの知識ノウレッジによって生まれてきた。例えば日本の古神道の中にもノーシスを認めることができる。神道の儀式や祭のなかにノステイックなシンボルが見られる。また、チベッ

トの仏教もその基礎にノーシスがある。あるいはエジプトのピラミッドにも、アステカ、マヤの神殿や古文獻にも。

日本民族が民族自身の神秘として、永い間伝統として守り、受けついできたものの一部はまぎれもなくノーシスである。ノーシスは民族の歴史とともに受けつがれてきたものである。

原始キリスト教徒たちのなかにも、ヘブライ人のカバラにもノーシスの原理はある。古代中国の道教のなかにもノーシスの基礎は見出される。

逆に言えば、すべての文明の一番奥深いところにノーシスはある。従って、一つの文明の奥儀を理解すれば、他の文明も理解することができる。ノーシスの鍵をもつてすべての文明を掘り下げ、そして神秘の扉を開けることができる。

ノーシスはすべての宗教の源泉である。またすべての芸術のインスピレーションであり、さらにすべての科学の起源にもノーシスがある。

従って、ノーシスはすべての宗教を自分の子として認め、決して拒絶するものではない。ノーシスの知識を理解することにより、キリスト教信者は真のキリスト教徒たりうるのであり、仏教徒はその真髓にせまることができるのである。

ノーシスに属する重要な古代文獻のなかに、コプト語で表記されたパピルスがある。それは『ピステイス・ソフィア』と呼ばれ、そのなかにはキリストが復活後十一年間にわたって使徒たちに伝えた秘密の教えが記されている。

紀元後二世紀に表わされたとされるこの価値ある文書は一七八五年、大英博物館の所蔵となり、一八四七年にラテン語、一九二四年に英語、その後ドイツ・フランス・スペインの各語にも訳出

されているが、そこに秘められた神聖なる秘密の深さゆえ、現代にいたるまで正当に解釈されることがなかった。

このなかでは霊の救済と、聖書の黙示録のつづきとしての人類の運命についての記述が特に重要である。霊の最終的救済にいたる方法についても明確に答えが与えられている。

救世主は使徒たちに「光の神秘をすべての人間が受けるように伝え広めよ」、「自分自身に注意せよ、罪を犯すな。悪の上にさらに悪を積み、悔い改める時間もないまま肉体の外に出ることのないように。なぜなら、永遠に光の王国に入ることのできない無縁な者となるからである」と述べている。

『ピステイス・ソフィア』が重要なノーシス文獻だと言っても、ノーシスがカトリックやプロテスタントに属するという意味ではない。キリスト教成立以前の『死海文書』も、またノーシス文獻である。

ノーシスはいつの時代にも、どこにでも存在する。人類の歴史のなかで叡知を伝える神話に、古代都市の神殿に、中世の錬金術に、宗教の奥儀に、今、光をあてて明らかにする、それが現代の「総合的ノーシス」である。

サマエル・アウン・ベオールについて

永い、永い間、秘中の秘とされた「性の秘密」はイニシエートたち（奥儀に通じた人たち）や、秘教的グループに限られて、ひそかに保持されてきた。それを手に入れるために何人の勇敢で不屈

な研究者たちが命をかけたであろうか。「性の秘密」はつい最近、一九五〇年頃まで、決しておおよけにされることのない神祕のベールでおおわれていた。

しかし一九六二年二月四日以来、我々の太陽系は水瓶座の時代に入った。このアクエリアスの時代は「光の時代」、「直観イニシエーションの時代」であるとも言われる。この光の時代の到来とともに、イニシエートの一人であるサマエル・アウン・ベオール (SAMAEI AUN WEOR) が「性の秘密」と「近代的ノースリス」をおおやけにした。世界ではじめてすべての神祕に光をあて、その実用的意義を明らかにしたのである。今、それは光を求めるすべての人々の手の届くところにおかれている。彼こそ近代的ノースリスの創始者である。彼が明らかにしたノースリスの鍵キは、第一に性の秘密であり、次にそれにもなった心理の浄化、心理的ワークについてである。

人類の歴史には、人類を導く教育者となる人が時に現われる。彼等が現われる目的は、人類が存在の目的を見失い、道をふみはずした時に正道を示すことにある。まさしく、マスター・サマエルはこれら人類を導くグループに属している。彼の役割はこの人類に最後の救世のメッセージを与えることである。

一九四〇年代、彼は南米コロンビアで家族とともにネバダ山脈の山奥で貧しい生活を送っていた。すでに叡智を持って生まれついた彼はそこで多くの農民たちの治療に無料であたっていた。この治療法はユニバーサル医学と呼ばれる古代エジプトのミイラ作りにも使われた知識をもとにしたものである。また彼は自然医学のすばらしい知識も実践した。それは自然界の「精エレメンタル」を使つての治療である。すなわち薬草を使う時、その成分の作用より、「精」によって治療するという方法である。

昼間の治療が終ると、夜は人類に与えなければならぬメッセージを伝えるべく、本の執筆に専念した。その結果あらわされた最初の本が『完全なる結婚』(El Matrimonio Perfecto, 1950) 日本訳は一九八四年の予定)である。この本のなかで彼は初めて人類に「性の奥儀」を明らかにしてくれた。しかしそれによって彼は投獄されたのである。この時代(一九五〇年)に性に関するテーマをおおやけにした不道德と、医師の免許を持たずに治療行為をしたかどによって、

彼はこの投獄中を執筆活動にあて『カルメンの聖母』(イニシエーションの聖母)が書きあげられている。

監獄から出た時から、ラテンアメリカにノースリスを普及するための本格的活動が開始された。数多くの講演活動と著作活動が精力的に展開され、その著作は七〇冊に及んでいる。それらすべての作品を彼は無償で人類に提供している。

治療行為をしながらノースリスを広めていた彼は、いつもその他の医療団体から追われることになり、次第に北上し、一九五〇年代の終りにメキシコにまで到った。メキシコ人である彼はヨーロッパ、アジアにもメッセージを伝えるため、その後のノースリス普及の本拠をメキシコシティに置いたのである。

彼は素朴な人々、正義を求める人々、精神的な真の進化を求める人々のために書き続けた。今、彼の著作は世界中に普及されている。スペイン語の原書から英、仏、独、伊、葡など各国語に翻訳され、最近アラブ語への翻訳も試みられている。本書は日本語訳の第十冊目である。

ノースティック心理学はノーシスの第一歩

この『ノーシス心理革命』(Psicologia Revolucionaria 1976)は、変革のための第一歩である。自分自身が心理的に位置する場を見極めさせるものだからである。スタートラインがどこにあるかも知らずに始めることはできない。

そして「心理」を深めて行く時、性エネルギーとの密接なつながりは見のがすことのできない重要なポイントである。

本来、性エネルギーは中性であり、陽性(創造的)にも、陰性(破壊的)にも使える強力なエネルギーである。本書はこの性エネルギーを建設的なポジティブな方に方向づける方法に基づき、人間が内的な平和に到達することを可能ならしめる道程を示している。

人間が絶えず探し求めているものは、自由になることである。しかし、人間はどこにいても、一人でいても自分自身の心理に閉じ込められている。自分自身の心理の動き、そして動かしている原因を理解することなく、人間は決して自由になることはない。その「自由」への道標が本書のエッセンスである。

ノーシスはただ単に神話や宗教のシンボルを解釈するだけではなく、肉眼で見えない次元の出来ごと、夢や幽体離脱、死後の世界にまで浸透できる。しかも哲学的概念にとどまるのではなく、日常生活に適用させ、その実用的効果を得ることに特に焦点を合わせている。

絶え間ない自己観察をはじめとして、段階的プロセスを通して得る「意識の目覚め」の状態を保

持することによって真の生き方は獲得される。

「意識の目覚め」は次の三つの要素に集約される。

①心理的死

我々の心に巢食う怒り、ねたみ、利己心、肉欲、うぬぼれ、怠惰、虚栄、恐怖などの欠点を絶え間なく排除することを意味する。これらの欠点は、ノースティック心理学で「エゴ」と命名され、エゴこそが価値ある「意識」をたえず妨害しているのである。このようなネガティブな心理的エネルギーの変換——すなわち根絶が達成された時、意識の目覚めは確立され、第二の誕生を迎える。エゴに閉じこめられていた本来の自己が解放されるのである。そしてまた同時に、エゴ根絶の過程を通して得る高次元の知識の獲得である。

②錬金術的誕生

性エネルギー昇華による内的な「黄金の子」の誕生をいう。我々の性ホルモンを宇宙生命の基礎エネルギーとして生かし、魂の衣となる「黄金の霊体」を作るための原料を手に入れることである。性エネルギー昇華テクニックはグラン・アルカーノ(偉大なる秘儀)として今まで秘密とされていたものが、ノーシスの教えを通じて公表されている。(『ノーシス マニユアル I』参照・新泉社近刊)

③ノースティック・イニシエートへ

①②のワークと平行して人類のために献身することである。この知識を世界中の人々へ何の代償も期待せずに広めることである。人類の歴史の最後の一駒である、救世のメッセージが受けられるように隣人に働きかけるのである。ノーシスの教えを一人でも多くの人に広めること

こそが、民族を退廃から守り、狂暴化から防ぐ道であり、これが戦争排除のもっとも強い武器ともなるのである。

日本とノーシス

現在、マスター・サマエルの教えを受けた多数のインストラクターたちが、世界中でノーシスの普及にあたっている。ノーシスは知識の独占や商業化をすることなく、宗派的、政治的な意図も持たない。この知識はすべての人々、すべての宗教、すべての国々に順応できる自由なシステムである。

日本でのノーシス普及が本格的に開始されたのは、一九八二年四月からであるが、日本での受け入れられ方はすばらしいものがある。すでに日本人インストラクターの準備ができ、何か所かで日本人による普及が始まっているほどである。

それは日本民族と社会が大変奥深いことに起因している。ほとんどの外国人は日本人の国民性の奥深さに浸透することができず、三十年以上も日本に住んでいる外国人でさえ、日本人は理解できないという人もいる。それは日本人を表面的部分でしか観察しないからで、その人にとって日本人は神秘とされてしまう。

ノーシスもまた奥深い知識であり、日本人の心の奥底にまで浸透して、その琴線にふれたならば、ノーシスは容易に日本人に受け入れられるのである。

日本でのノーシスの受け入れられ方には、大きな可能性がある。なぜならそれは輸入された知識ではないからである。日本人にはなじまない、不可解な知識ではないからである。日本人自身が、前縄文時代からその根を脈々と保存してきた古神道の儀式に、そして仏教の教えに新たな息吹きをあたえるのが、近代的ノーシスに他ならない。

一方で日本は今、近代的なエレクトロニクスの時代を生きている。工業的科学的技術的に頂点にあり、そのまま上昇を続けることができるか、または他の先進国と同様、病んで地に落ちるかという、日本の歴史のなかでも最も危機的な瞬間にあると言えよう。まさにこの時にノーシスは日本に到着した。

ノーシスは古い伝統に対峙するものではなく、むしろそれを近代化する効果を持つものである。そして精神の奥底にひそんでいる意識をゆり動かし、呼び起こす。

人間は外部(肉体)と内部(魂と霊)からできている。肉体的生活のために衣食住が必要であるのと同様、内部のためには精神的な糧かたが必要である。しかし日本は物質的な技術的開発のみに力を注ぎすぎ、もう一方の精神的な価値の開発をおこたった結果のアンバランスに苦しんでいる。

ノーシスは内的な力を活動させるための知識である、ノーシスによって内的な渴望をうるおすことにより、外と内のバランスをとることができ、人間を調和的開発に導くことができる。

先進国といわれる国々の多くが退廃の道を歩んでいる時、日本に新しい希望を与えるノーシスが迎え入れられる必然性があると確信するものである。

日本民族は「底力」を秘めている。しかし力にはそれを正しく使うための導きとなる知識がいる。日本は工業的、商業的に成功しているので、精神の分野における成功が日本の今後を決めると

言っても過言ではない。

ノーシスは普遍的知識であるから、一人の人間の問題解決と同様、国際的、社会的問題の解決にそのキイを適用させることができる。そしてまた同時に、人間洗練のための芸術と哲学を柱としている。

アジア諸国の先端に行く日本は、物質的な経済交流のみでなく、彼らに新しい文化を提供することが待望されていると言えよう。それによってアジア諸国の人々も新しい精神のルネッサンスに参加することができるだろう。

また、ノーシスの知識は崇高な技術に結びつけることもできる。それは国際摩擦を引きおこす商業的技術ではなく、目に見えない次元——四次元の存在を確認する形而上学的なエレクトロニクスの技術である。日本のテクノロジーがこれを獲得したならば、無限の可能性の原野を手に入れることになる。

実用的で総合的な知識であるノーシスは、今、全世界の三千万人の人々に影響を与えている。

中南米ではメキシコの他に、コロンビアを始め、ベネズエラ、ブラジル、ペルー、エクアドル、アルゼンチン、チリ、プエルトリコ、パナマ、ニカラグア、エルサルバドル、グアテマラにすでに普及されている。

アメリカ合衆国では、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、シカゴ、ニューヨーク、マイアミで活動が展開されている。またカナダのモントリオール、ケベック、ヨーロッパではイタリー、スペイン、フランス、ドイツ、ベルギー、オランダ、スイスにセンターがある。最近ではアフリカにも普

及されている。

日本ノーシス・センターは一九八三年四月に開設された。

113-91 東京都文京区本郷郵便局私書箱一〇八

日本ノーシス・センター

ミゲル・ネリ

ノース心理革命 目次

ノースについて日本の読者へ—— 1

第1章 精神のレベル—— 17

第2章 すばらしい階段—— 24

第3章 心理的革命—— 27

第4章 エッセンス(魂)—— 31

第5章 自分自身を告訴する—— 36

第6章 人生—— 40

第7章 内面の状態—— 43

第8章 あやまった心理状態—— 47

第9章 個人的経過—— 52

第10章	さまざまなエゴ	56
第11章	親愛なるエゴ	60
第12章	根本的变化	64
第13章	観察すること 観察されること	69
第14章	ネガティブな思考	73
第15章	個性	79
第16章	生命の書	86
第17章	機械的創造物 人間	90
第18章	超実質的な糧	96
第19章	良き家のあるじ	101
第20章	二つの世界	105
第21章	自己観察	109
第22章	おしゃべり	113

第23章	関係の世界	118
第24章	心理の歌	122
第25章	回帰と反復	130
第26章	幼児の意識	137
第27章	収税吏と偽善家	141
第28章	意志	149
第29章	斬首	157
第30章	永続的重心	169
第31章	ノーシスのエソテリック・ワーク(秘儀の仕事)	179
第32章	心理的ワークにおける祈り	183

第1章 精神のレベル

我々は、一体なに者であろうか、どこから来て、どこへ行くのであろうか。なんのために、どうして生きているのであろうか。

間違っって、「人」と呼ばれているものの、本来みじめなインテレクチュアル・アニマル（理性ある動物）である我々は、自分の無力を知らないばかりか、それを知らない、という事実さえも知っていない。

さらに救いがたいことは、現在我々が置かれている、まことに奇異なそして困難な状態である。我々のすべての悲劇の原因も知らずに、すべてを知っていると確信して疑わない。

この、「理性ある動物」の一人、それも、自ら有力者であると自負している人を、たとえば、サハラ砂漠の真中につれて行って、彼がなにをするか、空から

観察してみよう。

なにもいうことはあるまい。事実がおのずから説明するであろう。「知識人種」は、いくら強いとうぬぼれても、どんな動物よりも頭が良いと信じていても、実際は、恐ろしく弱いものである。

「理性ある動物」は、百パーセント愚かである。いかに自分は優れていると考えていても、幼稚園から、小学校、中学校、高校、大学まで卒業して、模範的な父親だと人々にいわれていようが、愚か者であることに変わりはない。

学識があり、もの腰が繊細で、肩書と財産にめぐまれた人でも、ほんの少し胃が痛むだけで、陰気で、不幸で、みじめな精神状態におちいつてしまふ。そして結局は以前と同じ不幸でみじめな我々なのである。

この見地から、世界史を見てみれば、大昔の未開人と、現在の我々とは、まったく変わらないばかりか、進化するどころか、逆に退化してきていることにお気づきだろう。

この二十世紀の世界に存在する、商業、戦争、売春、性的退廃、麻薬、アルコール中毒、想像を越えるような残虐行為、無数の極悪非道な犯罪など、すべては現在の我々人類の精神の反映であり、繁栄などとは、間違っても呼べるような代物ではない。

時間がたてば進化する、などと考えるのは馬鹿げている。残念ながら、学識がありながら無知である「学者たちは、「進化論の定説」に、未だに縛りつけられている。

人類の、暗い歴史のページは、どの時代にも変わることなく、醜悪な犯罪行為、悲惨な戦争で彩られている。にもかかわらず、現代の「超文明人」は、戦争などというものは二次的なもので、我々の「近代文明」とはなんの関係もない、一時的な事故のようなものだ、と確信して疑わない。

重要なことは、我々各自の在り方である。ある人はアルコール中毒で、他方は禁酒家。また、正直者もあれば、恥知らずもいる。

大衆は個人の集団である。各人の在り方が大衆の在り方であり、政府の在り方を決定する。また大衆は、個人の延長である。社会の、そして一国の国民の変化は、各自の変化なしには不可能なことである。

我々の社会には異なった階層が存在する。宗教家、売春婦、商人、農民など。これと同様に、我々の内なる精神の水準も、それぞれ異なっている。

我々の本質的な姿である、高貴であるか、けちくさいか。高潔であるか、ず

* イギリスの生物学者ゲーウィングが『種の起源』(1869)で体系づけた生物学理論。原始生物から種々に進化してさまざまな高等生物が生まれてきたとする。一般に社会生活や精神生活についてもこの考え方で説明しようとするのを進化主義という。

るがしこいか。おだやかであるか、野卑であるか。貞節であるか、情欲的であるか。それらの精神的レベルの違いによって、各自は、自分のまわりに多様な環境を呼ぶこととなる。

情欲的な人であれば、常に好色なドラマを呼ぶであろうし、時にはそれが淫奔な悲劇さえ起こすかも知れない。酒飲みであれば、当然酒を呼び、バーや飲み屋がよいをするであろう。これは明らかなことだ。

例えば、高利貸はなにを呼ぶであろう。エゴイストであろうか、他人からのねたみ、恨みだろうか。それとも、末は刑務所か不運か。

とはいえ、苦勞に疲れはて、人生の苦汁を飲んだ人々は、なにかの変化を願っている。自分の人生のページを変えたいと願っている。

気の毒な人々よ、人生を変えたいと願っても、そのすべを知らない。どういう方法で、どういう手順によって変えればよいのかがわからない。まったく、出口なしの状態だ。

昨日起こったことは今日も起こり、性こりもなく明日も続く。何度も同じ間違いを犯してさえ、何年たっても、人生の教訓を学ぶことはない。

すべてを、一生の中で繰り返す。同じことをいい、同じことをし、同じこと

で悲しむ。この退屈なドラマ、喜劇や悲劇の繰り返しは、いつまで続くのであろうか。

それは、我々の内部に、怒り、強欲、肉欲、ねたみ、うぬぼれ、怠惰、大食いなどの、好ましくない要素が存在するかぎり、続くのである。

我々の道徳的水準、正確にいうと、我々の精神のレベル（水準）は、今どこにあるのか。

この精神のレベルが変わらないかぎり、いつまでも悲惨なドラマ、不運な場面は繰り返すのである。我々の周囲に起こるすべての出来事は、まさに、我々の内部の、精神のレベルの反映に他ならないからだ。

「外は内の反映である」と、断言できよう。人が内面的に変わり、そして、その変化が徹底的であるときに、はじめてその人の周囲の状況が、生活が、変化をとげるものである。

最近（一九七四年）、他人の土地に勝手に侵入して来た人々を観察してみた。この人々は、メキシコでは、俗に「パラシュート部隊^{*}」という名で知られている。筆者の自宅の近くにも、無数の「パラシュート部隊」が侵入し、これを、ごく近くで観察することができた。

* どこからともなく降って来るのでこの名がある。一九七〇年代以降、空地に何の許可もなく、木やトタンでブラック小屋を建て住みつく。農村からの都市流入者たち。

貧乏であることは、決して悪いことではない。それが重要なでもない。大切なのは、精神のレベルである。

彼らは、毎日のようにけんかをし、酔っぱらい、ののしりあい、ときには仲間どうし殺しあう。彼らの住む粗末な家は、文字通り、憎しみが充満している。

筆者は何度も考えた。このような人々の中の一人が、彼の内部から、憎しみ、怒り、淫乱、アルコール、悪たれ、残酷さ、エゴイズム、中傷、ねたみ、うぬぼれ、それらを取り去ることができたなら、当然、彼にはこれまでとは異なった種類の人々が近づくだろう。単に、心理の親和性の法則——類は友を呼ぶ——だけでも、彼は精神的に洗練された人々と知りあい、それによって、経済的にも、社会的にも、彼の生活を変えることができるだろう。

このようにして、彼はあの不潔な、憎しみに満ちた、下水道のような家から出ることが出来るのだ。

もし我々が、真に徹底的に人生の変化を遂げたいと願うならば、まず第一に、白人、黒人、黄色人種と、肌の色を問わず、また、無学であろうが、学識があるうが、すべての個々人は、精神的なレベルが異なるということを、理解しなければならぬ。

我々の精神レベルは、いったいどこに位置するのであろうか、このことについて、我々は一度でも考えてみたことがあっただろうか。自分自身の精神レベルをまず知ることなく、他のレベルへ移ることは不可能である。

第2章 すばらしい階段

まずはじめに、この退屈で、マンネリの生活、まったく機械的で、うんざりする人生からの脱出を、真の変化を、切に願わなければならない。

そのために、第一に明らかに理解しなければならないのは、中産階級であろうが、労働者階級であろうが、金持であろうが、貧乏であろうが、人間一人一人に、それぞれの精神のレベルが存在する、ということだ。

アルコール中毒者の精神的レベルは、当然禁酒家とは異なり、売春婦の精神的レベルは、乙女のそれとは違う、この事実は反論する余地のない、明白なことである。

この第二章では、下から上方へと伸びる、長い階段を想像してみよう、そこには、無数の段がついている。

我々はこの無数の階段の、どこかに位置している。自分より下の段には、下に属する人々がいるだろうし、また、上には上も存在している。

この垂直線上に、すべての人々の精神のレベルを見ることができ、各人はそれぞれ異なった位置にいることは明らかだ。

その人の、外見がいいとか醜いとかは、まったく関係がない。もちろん年齢も問題ではない。

ここで、——人が生まれ、育ち、結婚し、子供を持ち、年を取り、死ぬ——という時間の問題は、水平線上に限られた問題である。

この「すばらしい階段」、すなわち垂直線上に時間という概念は入る余地がない。この階段には、各人の、精神のレベルのみが存在するのである。

時間が経過すれば、我々は進歩するという、機械的な希望は、残念ながら、何の役にも立たない。我々の祖先もそのように考えていた。しかし実際は、その逆であることが証明されてきているのだ。

重要なのは、精神のレベルであり、それは垂直な階段である。各人は、そのうちの一段に位置しており、もう一段上に登ることも可能なのだ。

これこそ、「すばらしい階段」だ。その一段、一段は、異なる精神のレベルで

あり、明らかに、水平線上の時間とは、何の関係も持たない。

絶えず、我々のすぐ上には、一段上のレベルが存在する。それは、遠い、水平線上の未来にあるものではなく、現在この場所に存在する、我々自身の中に、この縦の線は存在するのだ。

明らかに、誰でも理解できるように、この二本線、「水平線」と「垂直線」は、我々の内部の心理の中で、一瞬、一瞬、交わり合い、十字を形づくる。

人格*（パーソナリティ）というものは、人生の水平線上に発展、展開するものであり、その線上の時間内に生まれ、そして終わる。つまり、人格は死ぬものであり、死人の人格に未来はない。人格は魂ではないのだ。

魂それ自体は、時間に属していない、したがって水平線とは、何の関係もない。魂は、今現在、我々自身の内部の垂直線上にある。我々自身の魂（存在の源）を、我々の外にさがす人は、まさかないであろう。

すると、次の事が明らかになるであろう。肩書、学位、昇進等々、我々の外部に存在する物質的世界の評価は、精神のレベルを登るための、魂の評価には決してならないということである。

* 生まれた時からの環境、家族、学校、国などの影響によって形成される表現。人間の最も表面的な行動や表現、雰囲気。

第3章 心理的革命

ここで皆さんに、我々自身の中に存在する、数学的「点」を思い出していただきたい。

この「点」は、過去に存在することは間違ってもないし、未来にあるものでもない。この神秘的な「点」を発見したいと思う人は、自分自身の内面に今現在、今いる所にさがさなければならぬ。「今」とは一秒先でもなく、一秒あとでもない。

この「点」は、聖なる十字を形づくる、垂直線と、水平線の接点のことである。ということは、我々は一瞬一瞬、垂直線と水平線の二本の道の前に立たされている。

水平線の道は、いわゆる平凡な道であり、明らかに、大多数の人々は、垂直

線の存在さえ気づかずに歩いている。

垂直線の道は、それとは異なっている。それは革命家達の道であり、英知ある反逆者達の道である。

貴方が自己を忘れまいと思う時、自分の欠点を何とかしてなくしたいと努力する時、物質世界の諸々の悩みなどを客観的にながめるとき、貴方はもう、垂直線の道を歩きはじめているのである。

確かに、ネガティブな暗い感情、日常生活に起こる数々の問題、商売、負債、支払などの問題の中にあつて、自己を失わずにいることは、たやすいことではない。

何らかの理由で、働き口を失った失業者にとっては、収入の心配をしないこと、自分に起こっている問題を客観的にながめることは、おどろくほどむずかしい。

苦しんでいる人々、泣いている人々、他人の裏切り、恩知らずな行為、中傷、詐欺、それらの問題の渦中にある人々は、問題の中に埋没して、自己を忘れてしまう。完全に、外部の道徳的悲劇と自分を同一視し、己内の魂の存在を思い出すことがない。

自分自身に働きかけることは、垂直線の道を登るための基礎である。もし、自分自身に働きかけることをしないならば、いかなる人であろうとも、この偉大なる革命の道を歩むことはできない。

ここでいう働きかけ、仕事とは、心理的なものをさしている。現在我々の存在するこの一瞬のある種の変化、変換に従事することであり、一瞬一瞬を、真に生きることが学ぶ必要がある。

例えば、感情的にしろ、経済的にしろ、また政治的な問題にしろ、何らかの問題で希望を失ってしまった人は、明らかに自分自身を忘れてしまっている。

こういう場合は、一瞬、「ちょっと待て」と立ち止まり、自分の状況を観察して、自己を取りもどそうと努める。そして、自分の行動、態度の意味を理解しようとしてみる。この努力が、仕事なのである。

もし、ほんの少しだけでも、冷静に考えてみれば、すべては過ぎ去るものであるということを理解できる。一度死が訪れれば、世界中のすべての虚栄は、灰と散ると考えてみれば、人生そのものが、空しく、はかない。

一つの問題も、実は単なるゴザに火がついたようなもので、すぐ消えるということが理解さえできたなら、それだけでも状況は変化をとげるのを見るだら

う。人間の機械的な反応を変化させるのは、論理的照合と、冷静な判断によって可能である。

明らかに人々は人生の各種の出来事の前で機械的に反応する。あわれな人々よ。常に犠牲となる誰かにお世辞を言われれば有頂点になり、恥をかかせられれば苦しみもだえる。ののしられればののしり返す。傷つけられれば傷つけ返す。ただの一度も自由になれない。喜びも悲しみも希望も失望も他人の思うがままになる。

水平線上を歩く人はちよとど楽器のようなものである。他人がその時弾いた音でひびくからである。

この機械的の反応を変えることを習った人は、事実上、垂直線に入ったと言えるのである。

これは、我々の精神のレベルにおける基本的な変化であり、「心理的革命」のすばらしい始まりである。

第4章 エッセンス(魂)

生まれたばかりの赤子が美しく見えるのは、そのエッセンスのゆえである。このエッセンスは、それ自体が、まことの真実を形成する。

すべての赤子に存在するエッセンスの成長は、通常、確かにたいへん初期のものである。

人間の肉体は、生物学的法則に従って、成長し、発達する。しかし、この法則はエッセンスに関しては、そのとおりあてはまるものではない。

エッセンスが、他の助けなしには、ほんの少ししか成長できないことは、明らかである。

もつとはつきり言うくと、エッセンスの、自然な、自発的な成長は、人間の三歳から五歳までの間には可能である。

動物進化の法則に従って、エッセンスも機械的に成長、発達を続けると考える人が多いが、事實は、まったくそれと異なる。

エッセンスの成長のためには、特別な働きが必要である。ここで筆者の言わんとしていることは、前章でのべた、自分に働きかける仕事である。エッセンスの発達、意識の仕事（努力）と、自発的苦しみのみによってなされるものである。

この仕事とは、銀行員とか、大工とか、事務とかいう職業とは、まったく関係ないことを理解していただきたい。

この仕事は、すでに人格を形成した、すべての人々にとって、心理的なものである。

我々は自分の中に、いわゆる「エゴ」というもの、「我」というものを持っている。

残念なことに、エッセンスは、このエゴに囲まれて、ちょうど、ビンづめにされたように、動きがとれないでいる。

この心理的エゴを絶滅すること、その望ましくない要素を崩壊させることは、緊急で、一刻も遅らせることはできない。これが我々自身の仕事（自分に働き

かける）の真の意義である。

心理的エゴを崩壊させることなく、エッセンスを自由にすることは、不可能なことである。

エッセンスの内にこそ、真の宗教が存在し、仏陀、大いなる知恵、天にまします聖なる父の粒子が存在し、魂独自の自己実現を可能にさせるすべてのデータが存在する。

心理的エゴを崩壊させるには、その前に、我々が内部にもつ、非人間的要素を取り去らなければならない。

現存する、恐ろしい残酷性、行動の裏にかくされたうらみ、競争心、友も、親も失わせる金銭欲、悪意に満ちたうわさ話、中傷、アルコールによる罪、街に充満する肉欲など。

これらの、いまわしい行為が、我々の中で減少するに従って、エッセンスは解放され、成長し、発達して行くのである。

明らかに、我々の内でエゴが死んだ時、エッセンスは、その光輝な姿を表わす。エゴから解放されたエッセンスこそが、真の美を我々に与え、その美が、完全なる幸福と、真実の愛をもたらす。

* 人間の敵。人間の精神的進歩を妨げる目的で罪を犯すように常に心理（霊）に誘惑を与える。我々のマインドの中に住みつき、寄生虫のように我々のエネルギーを吸って生きている。それらは怒り、憎悪、嫉妬、肉欲、怠惰などで、我々の言動の欠点となって表われる。エゴは性エネルギー昇華と心理的ワークによって絶滅可能であり、それによって、人間はエゴの奴隷から解放される。

* Auto-realization of the being 人生の主要目的は、永遠に神々と結びつくための精神的進化であり、それは他力本願的なものでなく、自主的な努力による自己実現である。魂の乗り物である霊（心理）を汚染している付着物（エゴ）を完全に洗浄し、魂独自の光輝く存在を獲得すること。

人間のなかの能力相克図



「己に死す」(正確にはエゴに死す)、すなわち、心理的エゴを絶滅した時、初めてエッセンスのすばらしい感覚と、能力を我々は満喫することができるのである。

第5章 自分自身を告訴する

我々一人一人の内部に存在するエッセンス（魂）は、高いところから、空から、星々から来ている。

明らかに、このすばらしいエッセンスは「ラ」音階^{*}（我々の住む銀河系宇宙、天の川）から来ている。

これが、次の「ソ」音階（太陽Sol）を通り、「ファ」音階で、この地球上の我々の肉体内部に侵入する。

我々の肉体の両親は、このエッセンスを迎えるべく、我々の肉体を創ったのである。

徹底的に、自己のエゴを絶滅するために働きかけ、そして同胞のためにつくせば、我々は勝利の旗をかざして、ウラニア^{**}の深い胸の内にもどることができ

る。

我々はこの地球上に、何らかの理由があつて存在し、何かのために生きていく。

自分の人生について、生きることの目的を真に知りたくいと願うなら、我々は自己の内部を観察し、研究し、理解しなければならぬことが山ほどある。

生命の目的さえ知らずに死んでいく人々の一生は、悲劇そのものである。我々一人一人は、この苦しみの人生の意義を発見しなければならぬ。

すべての人々には、その人生の中に、苦悩を与える何かがあり、その何かと、我々は着実に戦っていかなくてはならない。

不運の真中に居続けることは、不必要なことであり、我々が不幸に打ちのめされている原因を消し去ることこそ、必要なことである。

肩書、名誉、学位、財産、主観的合理主義、周知の美德などで思いあがるのは、何の役にもたたない。

偽善と馬鹿げた虚栄心は、人間をけがらわしく、古くさいものとさせ、新しいものを見る目を持たなくさせる、ということをし、決して忘れてはならない。

「死」は、ネガティブな意味と同時に、ポジティブな意味も持つ。イエス・

* 宇宙は音のハーモニーによって創られている。そしてそれぞれの表現に相当する、ひとつの音階（音の振動）を持つ。ひとつの天体、一人の人間もそれぞれの振動によって支えられている。「オクターブの法則」は宇宙の中で異なったオクターブを通して再生され、我々の魂も銀河系（天の川）のラ音階、太陽系のソ音階、地球のファ音階、の振動を通して肉体のミ音階に降りてくる。さらにレ音階は地中、ド音階は、一オクターブ上のドにつながり、絶対太陽への帰帰を意味している。

** Uranie 天文学と占星術のミューズで二人の偉大な音楽家（アポロンの息子リノスとディオニソスの娘ヒュナイオス）の母。この女神は片手に地球儀を、片手にコンパスを持つ。星空の母、宇宙の母で未来を司る。

キリストの言葉を思い出ししてみよう。

「死者は死者をして葬らしめよ」

多くの人々は、肉体は生きていても、実際自分自身への仕事をする意志もなく、従って、内面的変化の可能性は、まったく死んでいる。

この種の人々は、往々にして、彼らの定説や、彼らの信仰を持ち、その中に閉じこもっている。また、過去の記憶を化石のように大切にしたり、祖先からの偏見にしがみついたりする。おどろくほど平凡で、他人の言うことばかり気にして何もできない人々が、知識人だと確信していたりする。

このような人々は、世界はひとつの「心理的道場」であり、我々の内部にかくされたその醜さを消滅させる、修行の場であることをわかつてほしい。

もし、これらの気の毒な人々が、自身の悲しむべき姿を自覚するとしたら、きつと恐ろしきでふるえあがるだろう。

しかし、これらの人々は、常に自分はすばらしいと考えているものである。美德家だと自負していたり、自分は完全に、親切で、慈悲深く、高貴で、頭が良く、義務を果たす模範的市民である、と思いきこんでいたりする。

人生を修行の場として、合理的に生きるのはすばらしいが、人生そのものだ

けを目的とするのは、明らかにおろかである。自分の人生それだけを目的として、毎日生活している人々は、「変身」するための、自分自身に働きかける仕事の必要性を理解できていないのだ。

残念なことに、人々は毎日を機械的に生き、内面的変化ができることなど、考えもせず、一度も耳にしたことさえない。

変わることは、必要である。しかし人々は、どのようにしたら変わることができるのかわからずにいる。苦しんでいながら、何ゆえに自分が苦しんでいるのかも知らない。

財産を持つことが、すべてを解決するわけではない。金持ほど往々にして、悲劇的な生活をしているものである。

第6章 人生

現実の人生でも、あまりのコントラストに驚かされることがよくある。例えば、金持で、すばらしい邸宅に住み、多くの友人に囲まれて暮らしているような人が、想像もできない程、苦しんでいたりする。そして往々にしてその日暮らしの労働者、あるいは中産階級の人々の方が、ずっと幸せな生活を送っていたりする。

億万長者の数多くは、性的に無能であったり、多くの着飾った婦人達の中でも、何人、夫の不貞に苦しみの涙を流しているか知れない。

有名な政治家達も、どこに行くにもガードなしでは歩けない。

各人が、それぞれ意見を持つのは自由であるが、人生とは何であるかを知る必要がある。少し慎重に考えてみよう。

何と言おうが確かなことは、誰も何も知らない、ということである。人生は結果的には、誰にも理解できない、巨大な問題なのだ。

他人から訊ねられたわけでもないのに、自分の人生を語る人は、その時の事件や、名前や、日付けなどを引用し、とくとくと語ること大満足する。

しかし、これらの人々は、それらの出来ごとや、人々の名前や、事件の日付などは、まるで映画のスクリーンのように、外側の映像だけであって、その内面が不足しているということに気がつかないでいる。

「内面意識の状態」を知ることが、緊急である。あらゆる出来事は、それぞれの意識の状態に応じて、起こるべくして起こるものだからである。

状態は内面的なものであり、その外面への反映が出来事である。外面的に起こることが事件のすべてではない。

気嫌が良かったり悪かったり、心配したり迷っていたり、迷信深かったり、こわがりだったり、疑ってみたり、あわれんだり、自分のことだけ考えていたり、幸せな気分になったり、などなど。これらを、内面の状態だと考えていた
だきたい。

これらの内面の状態は、時にはそのまま外面に反映したり、また、間接的影

響を与えたり、時にはまったく、関係のない場合もある。

いずれにしても、状態と事件とは別個のものだ、常に外面が内面と近似のものであるとは言えない。

一見、楽しそうに見える事でも、実際に、内面までそうとは限らないし、反対に、不愉快な事件でも、その底には、まったく別の意味がかくれていることもある。

長い間待ち望んだことでも、それが実現する日になってみると、まったく期待はずれな、味気ない印象を受けたりする。

外的な出来事に、内面の状態がうまく一致していない場合がそうである。

また、往々にして、期待していなかった出来事が、結果的には忘れがたい、良いものとなったりする。

第7章 内面の状態

自分の内面の状態と、外的な出来事を、正しく組み合わせることは、大変か
しこい生き方と言えよう。

賢明に生きることとは、出来事に対応する、それぞれの内面の状態を、自分
自身のものとするものである。

しかし、人生をふり返えり、考える時、人々は外的な出来事のみがすべてを
構成していると考えている。

あわれな人々よ。

「ああ、あの出来事さえ起こらなかったら、人生はもう少し良かったですらうに」と、いつまでも思いこんでいる。自分は運がないばかりに、幸福になるチャンスを失ってしまったと思いきや、失った物を嘆き、かつて軽蔑したもの

をなつかしみ、昔のあやまちや、災難を思い起こしてめそめそする。

成長して、老いさらばえていくだけの人生は、植物的な人生であり、真に意識を持って生きる、存在すること、そのための能力（資格）は、己の精神の内面の状態の質による、という事実を、人々はわかろうとはしない。

人生の、外面的な出来事が、いかに美しく、すばらしいものであったとしても、それに対応する、適切な内面の状態がともなわれていないならば、結局、単調で、退屈なものに終わってしまうだろう。

例えば、人生における重要な出来事のひとつ、結婚式を待ちこがれている人がいたとする。ところが、待ちに待ったその当日には、心配のしすぎで神経質になってしまい、結婚式を心から喜び、その重要な儀式の意義を見出すことができず、すばらしい日になるはずが、無味乾燥な形だけの儀礼で終わってしまったりすることがよくある。

大宴会や、舞踏会に出席しているすべての人々が、心から楽しんでいると言えるだろうか。常に、一人や二人は、すばらしい祭りのなかでも退屈している人はいるものだし、音楽会の会場でも、その甘いメロディーに酔いしれて楽しんでる人のすぐ隣りで、同じメロディーに泣いている人もある。

外面的に起こる出来事と、それに対応する適切な内面の状態を、意識を持って組み合わせることの出来る人は、大変数少ない。

悲しい事に、人々は、意識的に生きるといふ事を知らない。感情にふり回されて、笑うべき時に泣き、泣くべき時に笑う。これは、感情をコントロールする、ということとは別である。

賢者は、快活で陽気であっても、決して熱狂したりせず、悲しい時でも、決して絶望したり、卑屈になることはない。暴力の真只中であろうとも、冷静を保ち、ランチキ騒ぎの中でも自分を失わず、色情的興奮の中でも、貞潔でいる。メランコリックで悲観的な人は、人生に生きる価値を見出せず、生きる意欲も持ち合わせない。毎日のように、自分の不幸をなげき、さらに悪いことには、他人さえも自分の不幸の渦の中に巻きこんでしまったりする。

この種の人々は、たとえ、毎日、祭りやパーティーの席に出かけていっても気が晴れることはないだろう、彼の心理的な病は、内なるものから発生しているからだ。明らかに、彼の内面の状態は有害である。

ところが、このような手合の人々に限って、自分自身を、公正で、美德家で、品位が高く、親切であると思ひこんでいるものである。

自尊心や、自意識過剰な人々、自己愛にどっぷりつかっている人々は、常に責任逃れの口実をさがしている。

こういう人々は、下等な感情に慣れ、毎日のように、非人間的な心理的要素をつみ積んでいくのは明らかである。

不幸な出来事、逆境、貧困、負債など、これらのものは、真の生き方を知らない人々にのみ属するものだ。

知的な、表面的な教養を身につけることを望む人は多いが、正しい生き方を学ぼうとする人は、まったく少ない。

外的な出来事と、意識の内面的な状態を分離したいと望むならば、具体的に言えば、人間としての品位ある存在を保ち続ける資格を失う事を意味している。

意識的に外的な出来事と、内面の状態を組み合わせる事を習得する時、その道は成功へと導かれていく。

第8章 あやまった心理状態

厳格な自己観察によって、日常生活の外的な出来事と、意識の内的状態とを、ロジカルに、完全に区別することは必要不可欠なことであることは言うまでもない。

ある立場に立った時、その時の自分の内面意識の状態、また、その時の外面的に起こっている出来事、そして、その二つの中で、自分自身はどのような位置に存在するかを、す早く知ることが必要である。

人生は、時間と空間の中で経過する出来事の連なりである。

「人生とは、魂の内でもつれる、苦しみの連続である。」と言った人がある。各人が人生をどのように考えようとも、それはまったく自由だ。ただ筆者は、過ぎ去る一瞬のはかない喜びには、常に失望の苦汁がつきものであると信じる。

外的な出来事には、それぞれ独特な味があるように、内的状態とはそれ自体種類の異なったものであることは明白である。

自分自身の内的作業とは、意識における、様々な心理状態をさしていることを強調したい。我々の内面には、無数のあやまちが存在し、そのあやまちに伴って、色々な間違った状態があることを、誰も否定できない。

真に自己を変革したいと願うなら、一刻の猶予もなく、緊急にそれらの間違った心理状態を改める必要がある。

これらのあやまった心理状態を、徹底的に正す時、実生活の場において完全な変化があらわれる。

真剣に、このあやまった心理状態に働きかけ、自己変革しようとする時、人生の不快な出来事にも、以前のように簡単に傷つけられることがなくなるであろう。

これは、実際に行動し、体験してのみ理解することができることである。

自分自身の改革のために、働きかけることをしない人々は、常に周囲の事情や、環境に左右される被害者である。ちょうど、嵐の大海にただよう、あわれな棒切れのように。

外的な出来事は、絶えることなく、無数に組み合わせを変えては、波のように押しよせ、影響を残していく。

確かに、良い出来事と、悪い出来事は存在する。他よりましな出来事もある。人生における、ある一部の出来事を変えることは、可能である。結果を変える、状況を変えるなど、これらは確かに、変えられる可能性がある。

しかしながら、実際どうしてもさけることの出来ない状況というものも存在する。その場合は意識を持って、その状況を受け入れる必要がある。時には、危険な状況、たいへん心を痛める状況があっても仕方ない。

明らかに、その時起こっている出来事の中に埋没し、自己を失ってしまうことがなければ、その心の痛みは消え去るものである。

ここで我々は、人生とは、これらの内面の心理状態の連続、連結したものであり、私的な人生の真の歴史は、この内面の状態によって形作られるということを理解する必要がある。

我々自身の存在のすべてを、注意深く調べる時、不快に感ずる出来事の多くは、自分自身の内部のあやまった心理状態により引き起こされたものであることを直接、自分自身で立証することができる。

アレキサンダー大王は、生まれつき穏和な性質であったが、あまりにも自尊心が強すぎ、その結果は、死をもたらした。

フランススコイ世が、みだらな、そしていまわしい姦通罪が原因で死んだことも、いまだ歴史に残る事実である。

マラー*は、例の邪心あふれる尼僧に殺された時、最後まで、自分は絶対に公正であると信じて疑わず、思いあがりと羨望心に満ちたまま死んだ。

富と権力にむらがる女達が、一人の「女たらし」の生命力を、完全に奪ってしまったことは疑問の余地がない。その「女たらし」の名はルイ15世という。

憤怒、嫉妬、野心などのために命を落とす人が数多いことは、心理学者のよく知るところである。

我々の意志が、馬鹿げた方向に、取り返しのつかないほど強く向かう時、我々は、墓場行きの候補者となる。

オセロは、嫉妬のために殺人者となった。刑務所は、このように、真剣でありながら、方向を間違った人々で一杯である。



幻想病を治療する医師

あやまった心理状態が日常生活の問題の原因である。エゴを除外するにしたがって、閉じこめられていた意識が解放され、決定的な変化が表われる。

* Marat, Jean Paul (1743-93)
フランス革命の時の革命政治家。法は支配階級の抑圧手段であり、人類の歴史は富者に対する貧者の対立であり、財産は常に暴力によって生じると主張した。人権宣言案や憲法私案を発表。入浴中に刺殺された。

第9章 個人的経過

我々のあやまった心理状態を発見したいと思うなら、まず、自分自身の観察を完全に行なわなければならない。あやまった心理状態は、正確な方法、手段をとれば、正すことは可能である。

内面的生活は、外面の出来事を引き寄せる磁石のようなものであるから、緊急に行なわなければならないことは、我々の心理に宿る、あやまった状態を取り去ることである。

望ましくない出来事を、根本的に変質させたいのなら、あやまれる心理状態を訂正することが、必要不可欠だ。

ある決まった出来事と、我々との関係を変化させることは、我々の内部の、いくつかの馬鹿げた心理状態を取り去ることによって可能になる。

一見外面的には、破壊的に見える状態であっても、そのあやまった内面的心理状態をかしこく訂正することによって、害がなくなるばかりか、建設的にさえも変えることができる。

我々に起こる、不愉快な出来事も、内面的に浄化することによって、貴方自身でその質を変えることができるのだ。

自分は強いから、コントロール出来ると信じていても、馬鹿げた心理状態を訂正しない人は、結局、周囲の事情や、環境の犠牲者、あるいは被害者となるしかない。

もし、真にこのまったく味気ない人生を変えたいと望むならば、我々の内部の家である、心理をととのえることが重要である。

人々は何事にも文句を言い、苦しみ、泣き、抗議する。できる事なら、生活を変えたいと思う。自分の不運から脱出したいと願う。しかし、残念なことに、悪いのは他人であると信じ、自分自身に関しては、何もしない。

内面の生活が外的状況を呼び、もしその外的状況が痛ましいものであるならば、それは、内面の馬鹿げた状態によるものであることがわからないでいる。

外は内の反映であり、内面的に変化するということは、貴方自身の、内部の家を整頓し始めることに他ならない。

外面的に起こった出来事より、さらに重要な事は、その出来事に対する貴方の反応の仕方なのである。

他人に侮辱的な言動をとられて、冷静でいられたか。不愉快な話しをする友人の前で、どのような態度をとったか。

愛する者の裏切り行為に、どのような反応をしたか、嫉妬の毒におぼれたか、逆上のみぎり殺してしまったか、そして今、監獄にいるのか。

病院、墓場、監獄、いたる所に、外面的な出来事に、馬鹿げた反応を示してしまつた、まじめでありながら、大変あやまった人々が多くいる。

人生で使うことのできる最良の武器は、正しい心理状態に他ならない。

猛獣を和らげる事も、裏切り行為をあばくことも、その場の適切な内的状態によって可能である。

あやまれる内的状態は、我々をこの世に存在するすべての邪悪行為の、無防備な犠牲者にする。

日常生活の最も不愉快な出来事に、正面から対決するために、その場合にもつ

とふさわしい内的心理状態にいたる方法を習得しなさい。

どのような出来事が起ころうとも、自分と同一視してはいけない。何事も過ぎ去るものであるということをおぼれずに、人生は、刻々と進行する映画のひとコマのようなものであることを学びなさい。そうすれば、必ずいい結果になるであらう。

常に忘れてはならぬことは、価値ないつまらない出来事でも、貴方の心理の内面のあやまりを除去しない限り、貴方をダメにしてしまう可能性があるのだということである。

人生における、外的な出来事を通過するためには、いく種類かの通過切符が必要である。すなわち、その場面に適した、的確な心理状態がそれである。

第10章 さまざまなエゴ

間違つて「人」と呼ばれている、「理性ある哺乳動物」は、真の意味での、個性(individuality)というものを持ちあわせていない。

この「哺乳動物人類」の心理的統一の欠如が、多くの困難や、悲劇の原因である事は明らかだ。

病んだ肉体は例外として、肉体は、完全な一単位として、有機的に統一された一体として働く。

しかしながら、人間の内部は、決して心理的に統一されたものではない。

ここで最も重大なのは——心理学まがいを教える学校や、秘教的学校が何とのおうとも——人間各人の内部における、心理的な構成は不在である、ということだ。

このような状態にあつて、人間が、単一としての調和のとれた内面生活を持つことは、不可能である。

「哺乳動物人類」の内面状態の特徴は、心理的多様性であり、すなわち、複数のエゴ(我)の合計であると言える。

この暗闇の時代における、無知な学者達は、「我」を礼賛し、崇拜し、祭壇にかかげて、「優我」、「真我」、「神聖我」などという名で呼ぶ。

これらの学識者達は、「優我」も「劣我」も、どちらも同じ、複数エゴの一部であるということを理解しようとしなさい。

実は、「哺乳動物人類」は、永続的な一個の我だけを持っているのではなく、数多くの、非人間的我欲の合計なのである。

間違つて「人」と呼ばれている、このあわれな「理性ある動物」の内面は、ちやうど、主人の代わりに、多数の召使い達が、おのおの勝手に命令したり、気が向いたことだけをやってみたりしている、無秩序な家に似ている。

秘教まがいの学校の、最大の間違いは、始めも終わりもなく、「永遠に死ぬことなく永続する我」を持っていると考える所にある。

そのように考える人が、もし一瞬でも意識を目覚めさせさえすれば、「理性あ

る動物」は、決して長時間、同じ状態ではいられないということを、自分で体験することができるだろう。彼の心理状態は常に変化している。
ルイス、と呼ばれる人が、いつでも同じルイスであると考えるのは、悪い冗談のようになるわけである。

このルイスと呼ばれる人は、彼の内部に、例の複数の我を持ち、それらの我は、彼の人格を通して自らを表現する。ある瞬間には、例えルイスがそれを欲していなくても、他のエゴ、例えば金銭欲が表に出ると、一瞬前のルイスとは別人になる。このように人は、刻々と変わっているものである。

誰一人として、変わらずに、終始同じ状態を続けられる人はない。実際、そのような各人の矛盾と無数の変化をよく知るのは、そうたいした学者である必要はない。

だから、誰かが「永続的な我」を持っていると考えるのなら、当然それは、他人に対しても、あるいは自分自身に対しても、越権に値する。

各人の内部には、多数の我、エゴが住む。この事実は、意識ある、目覚めた人であれば、直接彼自身で立証できることである。



心理的付着物

我々のマインドに巣くう多数のエゴ達が我々をおどろくほど醜い存在としている。彼らは我々に寄生し、エネルギーを消費させ、我々を奴隷とする。

第11章 親愛なるエゴ

何と言おうとも、上と下とは、一つの事物の二つの部分であるから、「優我^{ユウガ}」と、「劣我^{リョウガ}」とは、同じ我の二つの顔つきである。

「真我」「優我」「神聖我」これらの類は、エゴがのらりくらりと言抜けているのであって、自分自身をだます、偽りの一つの形態である。

エゴが生きのびたとき、「真我」だ「神聖我」だとかいう名を借りて、その間違った概念で、自分自身を偽る。

誰一人として、真に「永続的な我」というものは所有していない。

したがって我々は、誰一人として、真実、本物の自己の統一 (unity of the being) を持つてはいないのである。残念なことに、真の意味での「個性」さえも、我々のものではない。

このエゴは、肉体の死後も存在するが、しかし、始めあるものであり、したがって終わりもある。

エゴ、「我」とは、決して一つのもの、一元的なものではない。明らかにエゴは複数である。

チベットでは、これらの複数のエゴを「心理的付着物」、または単に(ネガティブであろうが、ポジティブであろうが)「価値^{バリュウ}」*と呼ぶ。

それぞれのエゴを、一人一人の人と考えると、一人の人間の中には、多数の人が住んでいる、と言うことができる。

明らかに、そこに住む人々は、一人は他より少しましだろうし、また、他にもっと悪い人も存在する。

それぞれのエゴは、ちょうど人間達のように、他よりめだとうと争い、すべてを独占したがる。インテレクチュアルな頭脳センターも、感情のセンターも、運動のセンター^{***}も、スキさえあれば、コントロールしたいと望んでいる。

この複数エゴに関する教えは、チベットにおいて、洞察力のある見神者、悟りを開いた人々によって教えられた。

我々の心理的欠点の一つ一つは、それぞれのエゴによって表現される。通常、

* Value 「価値」とは人生を通じて我々が蓄積するもの。その性質によってポジティブなものとなガティブなものがある。美德はポジティブな価値であり、狂信はネガティブな価値である。心理的な欠点のひとつひとつはネガティブな価値で、心理本来の姿ではなく、それに付着し汚しているものである。

** 人間の有機体を動かせる多くの機能のひとつに五つのセンターがある。

- 1 インテレクチュアル(頭脳)センター(頭部)
- 2 運動センター(首のつけ根)
- 3 本能センター(尾骨)
- 4 感情センター(太陽神経叢)
- 5 性センター(性腺)

これらのセンターの調和が、心身の健康を保つ。

我々は何千何万の欠点を所有するものであるから、我々の内部には、多数のエゴが住んでいるということは明らかだ。

心理的問題において、偏執症の人、自賛の傾向のある人、エゴ崇拜主義者達は、誰が何と言おうと、親愛なるエゴへの礼賛をやめようとはしないということ、我々は見て来ている。

この種の人々は「複数のエゴの教え」を、憎みきっている。

もし、読者が自分自身を真に知りたいと望むなら、自己観察そして自我観察をしなければならぬ。そして、パーソナリティ（人格）の内に潜む、数々の「我」を知ることが試みなければならぬ。

読者の中で、もし未だに、この複数エゴの教えを理解できない人がいるならば、それは、自己観察の分野において、実行が足りないことによる。

内面的自己観察を行なえば行なうほど、自分のパーソナリティの内に住む、多数のエゴを発見していく。

この時点でまだ、複数エゴの教えを否定する人々、神聖エゴを崇拜し続ける人々は、間違いなく、真剣な自己観察を行っていない人である。ソクラテスの言葉を借りて言えば「これらの人々は知らないばかりでなく、知らないとい

うことさえも知らない」と言うことだ。

真剣で、かつ深い自己観察は、我々自身を知るための、まず第一歩である。

複数エゴを否定する人々にとっては、内面の変化や感情の動きは不可能なことになる。

第12章 根本的変化

自分は単一であり、複数のエゴなど所有していない、という間違った考えを持っている間は、根本的変化を実現するのは不可能であることは言うまでもない。

このエソテリック・ワーク*が、きびしい自己観察から始まる事からして、我々の内部から緊急に絶滅すべき、望ましくない心理的要素の多様性を示している。

自分の知らない欠点を取り去るのは、明らかに不可能だ。その前に、必ず自身の心理の中から、除去したいと思う欠点をよく観察して、それを知っておく必要がある。

この種のワーク(仕事・努力)は、外面的なものではなく、あくまでも内面的なものであり、礼儀作法の本とか、表面的倫理のシステムなどで、成功すると考える人があったら、完全に間違っている。

自分自身の観察に注意を集中することから始まるこの仕事は、この点から見ても、我々一人一人の個人的努力を必要とする、ということが明らかであろう。

率直に言えば、この仕事を自分の代わりに、誰か他の人にやってもらうということは、まったく不可能であることを強調したい。我々の内部に存在する多数の主観的要素を、直接観察することなしに、我々の心理の変化はありえない。

エゴを直接観察すること、また、それを研究することの必要性を認めず、ただ、エゴの複数と、多様性を認めればよいとするのは、エゴ自身の逃げ口上であり、自分をだまし、自己逃避する一つの方法である。

真実、自分自身に正直になり、口実なしに自己観察する努力によってのみ、我々は確かに、単一なる存在ではなく、多数であるということが体験できる。

エゴの多様性を認めることと、厳格な観察によって、エゴを証明することとは、明らかに異なる二つの見地である。

自分自身で、エゴの存在を体験し、証明することなしに、複数エゴの存在を認めることのできる人はいる。しかしながら、体験するということは、注意深

* 秘教的努力または作業。自分をだますことなく、正直に絶えまなく自分の行動や反応を観察しながら行なう内的な心理的なワークをいう。正しい知識と意志の力を必要とする。

い、自己観察によってのみ、可能なことだ。

この自己観察をさける口実をさがすことは、間違いなく、退廃、墮落のしるしである。自分はいつも変わることなく、同じ人であるという錯覚を堅持している間、その人は変わることはできない。しかしこの仕事ワークの目的は、まさにその変化にある。我々の内面的生活である心理の、漸進的変化を達成することである。

人間の根本的変化とは、限定された可能性であり、通常自己観察の努力のない時、それは失われる。

自分は、単一であると考えている間は、心理の根本的変化の出発点に、未だ達していない。

複数エゴの存在を否定する人々は、明らかに、一度も正直に自己自身を観察したことのないことを示している。

逃げ道なしの厳格な観察によって、我々自身で、自己の心理は、単数ではなく、複数であるという現実を、体験し、証明することができる。

心理における、主観的見地の世界では、数々の宗教的、精神主義的理論によって、自己逃避の口実をさがす。

自分は単一であって、いつも変わることはないという錯覚は、自己観察を実行する際の暗礁となるのは明らかだ。

「自分は単数でなく、複数であると認める。それは、ノースで習ったからだ」という人がいたとする。しかし、彼がそのことを、自分自身で体験したものでなければ、この肯定がいかに正直なものであったとしても、結局は表面的肯定でしかない。

自分自身に証明し、体験し、実験する、そして理解する。これが基礎である。このように、意識を持って働き、努力することによってのみ、心理の根本的変化を達成することができる。

肯定することと、理解することとは異なる。「自分は単数でなく、複数のエゴの固まりだ、ということを理解する。」という人が、ただ口先でそう言うのではなく、心底理解してそう表現したのなら、彼はエゴが複数であるという教えを、彼自身で追体験したことを示すものである。

知識と理解も、また違うものだ。前者は頭のものであり、後者は心のものである。

エゴが複数であるという、この「複数エゴ」の教えを、知識としてのみ持つ

のでは、何の役にもたたない。残念なことに、現代は、知識は理解より、ずっと重要に思われている。というのは、間違つて「人」と呼ばれているものの、実際は理性あるあわれな動物は悲しくも精神、心を忘れ、まったく頭だけを發達させて来たからである。

「複数エゴ」の教えを、体験的に知り、理解することは、心理の根本的変化を實行するための、基礎である。

自分は単数でなく、複数のエゴからなるという角度から、慎重に自分を観察し始める時、明らかにその人は、自分の性質を変えるための、まじめな努力をし始めたということである。

第13章 観察すること 観察されること

これは明らかで、理解するにもそうむずかしくないことだ。自分は単数でなく、複数であるという地点に立ち、自分自身を本気に観察し始めると、自分の内部心理に対する、真の働きかけの開始となる。

このような自己観察を行う上で、障害となるものは、次のような心理的欠点である。

ミトマニー（自尊心過剰、自分を神のように思う。）

エゴラトリー（自我崇拜、真我や神聖我をあがめる。自賛。）

パラノイア（偏執症、知ったかぶり、思いあがり、頑固な妄想を持つ。）

自分は単数であり、永遠なる我われを持つ、という馬鹿げた信念を持っている間は、自分の内部心理に働きかけることは不可能である。

自分は単数であると考え続ける人は、自分の望ましくない要素である欠点を、排除することは決してできないであろう。いろいろな感傷、欲望、感情、熱情、好感などを、自分の持つ性質の種々の側面であって、変えることのできないものと考え、他人の前では、親に似たのだとか、欠点は遺伝するものだとか言って、それらを正当化しようとする。

エゴは複数であるという複数エゴの教えを受け入れる人は、自分のいろいろな欲望、考え、行動、熱情などは、各々異なったエゴであり、心理に寄生した不必要な附着物であると理解する。

自己観察に挑戦した人は誰でも、自分自身の内部心理に真剣に働きかけることになる。そして、精神の重荷となる自身の望ましくない要素を、心理から除こうと努力する。

もし真に、そして正直に、自分の内部の観察を始めると、自分自身を二つに分けることになる。「観察する自分」と、「観察される自分」とに。

もし、このような分離がなされないなら、自分自身を体験的に知り、理解するというすばらしい道を、一步も前進することはできない。

「観察する自分」と、「観察される自分」とに分けることをせず、どのように

して、自己観察ができるのであろうか。それは不可能だ。

このような分離がなされない時、複数のエゴの移り変わりの中に自己を見失い、エゴと自身を同一視してしまうことは明らかである。

複数エゴの、数々の表現と、自分自身を同一視してしまう人は、常に環境、情況の犠牲者である。自分の心理状態を変えようとせず、他人のなすがままに、流されるだけである。

自分自身を知らずして、どのようにして周りの状況を変える事ができるであろうか。一度も、自分の内的心理を観察したことのない人が、どのようにして自己を知ることができ得るであろうか。自分自身を観察者と被観察者に分けずして、いかに自分自身を観察することができよう。

さて、根本的に変えるためには、観察だけでは十分ではない。勇敢に自分自身のエゴと戦わなければならない。

「この欲望は、私の動物的エゴであるから、取り除かねばならない。」

「このわがままな考え方は、私のもう一つのエゴで、私をいつも苦しめているから、完全に崩壊させる必要がある。」

「私の心を傷つけるこの感情は、出しゃばりなエゴであるから、宇宙のチリ

となれ！」等々、心から自分で言えなければならぬ。

当然このことは、観察される自分と、観察する自分とに、二つに分けなければできない事ではない。

心理の推移をすべて、単数エゴの異なった働きと見る人は、何か間違いがある度に、それを自己と同一視して苦しむ。自分自身とエゴとが固く結ばれ、そしてそれゆえに、心理からそれらのエゴを離す能力を全く失ってしまっている。

この種の人々は、根本的な変化を達成することはできない。この種の人々は、往々にして、人生大失敗の道を歩むことは明らかである。

第14章 ネガティブな思考

現代のように退廃した時代にあつて、注意深い観察や、深い思考をめぐらすことは、実に奇妙なものである。

我々の頭脳に存在するインテレクチュアル・センターから、種々の考えが起るが、それらは、例の無知でありながら、悟りを開いたと思ひこんでいる人々がしつこく言う、「真我」からのものではなく、我々一人一人の持つ、多くの異なったエゴから発するものである。

人が何かを考える時、その人は、自分では断じて自分自身で考えている、と信じている。ところが、このあわれな「知的哺乳動物」は、多種多様な思考の源は、我々内部に巣喰う、異なる種類の「我」にあるということをおぼろげとしない。

これはつまり、我々は真に個々の思考者ではない、ということである。別の言葉を使えば、我々は真実、個別的、個人としてのマインド、考え、思考を持っていないということである。

しかしながら、我々内部の種々のエゴは、我々のインテレクチュアル(頭脳)・センターを利用して、彼の都合のいいように使ってしまう。

ネガティブな思考や、害を及ぼすような考えを、真に自身で考えているのだと信じこみ、それらを自分と同一視する(それらのネガティブな思考に流される)ことは、まったく馬鹿げたことである。

我々のインテレクチュアル・センターを不当に使用しているエゴが、そのネガティブな思考の原因であることは明らかである。

ネガティブな思考には、次の様な種類がある。疑惑、不信、他人に対する悪意、愛情のもつれた嫉妬、宗教的嫉妬、政治的嫉妬、友人、家族関係における嫉妬、強欲、獸的性欲、報復、恨み、憤怒、高慢、羨望、うらやみ、憎悪、盗み、不義、姦通、怠慢、暴食、等々、かぎりない。

まったく、我々の心理的欠点の数は多すぎて、たとえ鉄のような口と、千の舌があろうとも、正確にそれらの一つ一つを語るには十分ではないだろう。

当然の帰結として、次のように言うことができる。ネガティブな思考の中に埋没することは、乱暴、無秩序である。

原因なくして結果なし、という事は、読者もみなご存知であろう。自然に発生した考えとか、ひとりで湧き出た思考というものは存在し得ないということとを、ここで厳粛に断言する事ができる。

何かを考えている人と、その思考との関係は、表面的なもので、それぞれのネガティブな考えは、その源を、その人の持つ、各種のエゴに発する。

我々の内部には、さまざまなネガティブな思考を誘発する、たくさんの思考者(エゴ)が存在する。

この点を複眼的に観察してみると、我々の心理に住む各種のエゴ達が、それぞれの思考者であるということが理解できる。

明らかに我々の内部には、無数の思考者が存在する。しかしながら、それぞれの思考者は、一部分であるにもかかわらず、考えている時には、それがすべて、自分自身であると信じている。

自意識過剰者、エゴ崇拜主義者、自己陶醉者、ナルシスト、偏執症患者達は、断固としてこの多数の思考者の存在を認めようとはしない。それは、あまりにも自分自身

を愛しすぎていて、自分が偉大な存在であると信じているからである。

このように、普通の頭で考えることのできない人々が、どうして、自分自身の天才的思考力が、自分のものではない、などという考えを受け入れられよう。彼らは自分自身のことを、これ以上の者はないとでもいうように、もったいぶって、高慢に、また優雅にふるまったり、知識教養を見せびらかしたりする。昔話にも残っているが、アリストイポは、おのれの知識教養と、そして謙虚さを示そうとして、故意につきはぎ穴だらけの上着を着、哲学者らしい杖を右手に持って、アテネの街を歩いていた。

ソクラテスがその彼の様子を見た時、「お、アリストイポよ、上着の穴の奥のおまえの虚栄心がよく見える。」と大声で叫んだという。

自己観察に油断が入りこむと、その時考えていることにどっぷりとつかり、ネガティブな思考と自分を、同一視してしまうのは容易なこととなる。

そして結果的には、残念なことに、その際の思考者である、ネガティブなエゴの邪悪な力をより強くすることになる。

ネガティブな思考と、我々自身を同一視すればするほど、我々はその源であるエゴの奴隷と化すのである。

例えば、ノーシスを例にとってみよう。ノーシスは秘密の業わざとされていた。この業は、自分自身に働きかける仕事である。自分自身を改良したくないと思うエゴは、この働きかけにより、内部の心理における居場所を追いたてられ、挑戦を受けることになる。

すると、これらのネガティブなエゴは、その防御に立ちあがり、我々のインテレクチュアル・センターを駆使して、いろいろな理屈を使いこなし、我々の内部に、有害でかつ有毒なメンタルエネルギーを産む。

もしそこで我々が、それらのエゴのしわざである、ネガティブ思考を受け入れるなら、その時、我々のインテレクチュアル・センターはエゴにコントロールされ、そして、それによって引き起こされる結果にひきづられても、仕方がないことになる。

ネガティブなエゴというものは、常にだましたり、上手に理屈をこねることを知っている、ということをお忘れてはならない。つまり、このエゴは嘘つきなのである。

我々が急に気弱になり、ノーシスに希望を失い、自分はいくら努力しても欠点をなくすことはできないと、この道を捨てる時、それは明らかに、あのネガ

タイプエゴの一つにだまされたのである。

ネガティブエゴの一つ、「浮気」は、暖かい家庭を破壊し、子供達を不幸に落とす。「嫉妬」は、お互いの価値を認めあう二人の間に入りこみ、彼らの幸運を破壊する。

「精神的自尊心」のエゴは、その道に熱心な人々をだまし、うぬぼれさせ、彼らの師をうとんじ、憎み、そして裏切り行為にまで導く。

ネガティブなエゴは、我々の個人的経験、思い出、我々の希望、誠実さなど、数々の手段に訴え、その場に適した方法を選び、見るからに論理的な結論を出したりする。そして、その見せかけにだまされるといふ失敗をすることになる。

しかしながら、一度、自己の言動、反応に常に警戒する自己観察を習い覚え、エゴを現行犯で発見することができ、そう簡単にだまされはしなくなる。

第15章 個性

自分を一個のものとして考えることは、大変悪趣味な冗談である。しかし、不幸なことに、我々内部には、そうであると信じたい錯覚が存在する。

悲しいことには、我々は自分自身を買いかぶる傾向が常にあつて、真の個性をもってはいないという事実を、どうしても理解できないでいる。

さらに悪いことに、完全な意識と自分の意志を持って行動しているという、偽りの仮説を信じてしまっている。

何というあわれな我々であろう！何としつこい人種であろう！最悪の悲劇は無知であるということに疑いの余地がない。

我々の内部には、何万という様々な個が存在し、それらのエゴは、自分こそ先に立とうと争いあい、何のコントロールも、統一も、そこには存在しない。

我々が、真の意識を持ち、夢や幻想から覚めたとしたら、どんなにかこの人生は変わることであろう。

しかしながら、我々の不運は、ネガティブな感情、自己考慮、自尊心などに魅了され、催眠をかけられて、我々の真の内部の姿を思い起こすことができないことである。

意志は一つしかないと思っても、実際には、無数の異なる意志が存在する。

(それぞれのエゴは、各自その意志をもつ。)

この悲喜劇とも言える内部の多様性には、底知れぬおそろしきがある。異なる多数の意志は、我々の内部でぶつかりあい、常に争いが絶えることなく、まったく違った方向へ引っぱって行こうとする。

もし我々が、まことの個性を持っているとするならば、この内部の多様性かわりに、初心を貫き、迷いのない個としての意志があるはずである。

変わることに、それが一番の解決策である。しかし、変わるためには、自身自身に正直になる必要がある。

我々は、自身の心理の中につまっている品物を棚おろしし、何が余分で、何が不足かを知る必要がある。

すでに持っていると思っているものを、手に入れようとするはずはない。個性を持っていると信じるのは幻想だ。この世には確かに、個性を持っているなどと教える学校さえあるのだが。

まず、この幻想と戦うことが先決である。そうしないと、我々は、もつともらしく見せているだけで、さもなく、恥知らずで、邪心にあふれているという事実を見ることができない。

我こそは人間さまであると考えても、実際は、個性を持たない理性ある哺乳動物ではない。

自意識過剰者は、自分を神か予言者かなどと考えて、個性的思考や、意識ある意志さえ持っていないということを疑いもしない。

自尊心のありあまった偏執症者達は、この本を手にとろうともしないだろう。我々を馬鹿げた状態におとし入れるだけでなく、我々の真の精神的進歩をさまたげ、ネガティブな感情と嘘の経験の犠牲者としたくないのなら、我々は自己の幻想と、命を賭けて戦うことが必要である。

この理性ある動物は自分自身の幻想に催眠をかけられ、自分はライオンであるとか、ワシであるとか錯覚しているが、悲しいことに現実には泥にまみれるミ

ミズにすぎないのである。

自意識過剰者は、断固としてこの事実を認めようとはしない。誰が何と言おうと、自分は大神宮であると信じ、それが幻想であり、虚無であるということを疑うことをしない。

幻想は、人類すべてに影響を与える強い力であり、この「理性ある哺乳動物」を、常に夢の状態に保ち、自分は真の人間であり、個性と意識ある意志を持つと信じさせる。

我々が、自分自身を一個のものとして、完全なものとして考えるなら、何の進歩もなくその場に停滞し、結果的には退廃、墮落することになる。

我々一人一人は、それぞれ異なった心理状態にあり、もしそこから脱出を願うなら、各自の内に潜む無数のエゴを、直接発見しなければならぬ。

自分の心理を客観的に観察し、その内に存る多数のエゴを発見し、そしてその後、それらを根こそぎ捨て去るのが、自分の心の平和を得る道である。

正直な自己観察は、以前から持っていた自分自身に関するあやまった概念を基本的に変え、その結果として、我々は真の個性を所有していないという事を、具体的事実として自分自身に証明することができる。

自己観察を実行しないうちは、「我」は、個性を持つ一個の完璧な生物であるという幻覚に生き、一生その幻覚の中で生きることになる。

我々が、内面心理の根底から変化をとげないうちは、隣人達と正しい関係を持つことは不可能である。

内面の変化を果たすには、必ず何らかのエゴを捨てることが前提となる。

エゴを捨てるためには、自己観察なしでは成し得ない。

自分を個性あるものとし、自分は最高であるとする人々は、決して内面心理の多様性を認めようとせず、自己観察もしようとはしない、したがって彼らの変化は不可能となる。

エゴを取り去ることなしに、自己変革する事は不可能である。自分に個性があると信じる人の中で、エゴを捨てなければならぬということを受け入れる人があったとしても、彼は何を捨てればいいのか知ることにはできないであろう。

しかし、忘れてならないのは、これらの人々、自分の個性を信じ、自分自身をだまし続ける人々は、「何を捨て去るべきか知っていない」と、信じているものである。しかも、その「知らない、ということすら知らない」、これこそ、第一級の無知である。

個性を持つためには、すべてのエゴを破壊する必要がある。しかし、個性をすでに持っていると思えば、それは不可能なことである。

個性とは、百パーセント神聖なものである。それをもち得た人は非常に数少ない。しかしそれを持っていると思っている人の数は、大変多い。

ただ一つの我を持つと思っているならば、どのようにして複数のエゴを捨て去ることができるのであろうか。

正直な自己観察をしたことのない人々は、自分は一個の我の所有者だと考える。

しかしながら、この教えの中で、次の点を特に明白にしておかなければならない。というのは真の個性（一個のものとして、常に変わることのない個性）と、真我とか、そのたぐいの概念とを混同する危険があるからである。

真の個性は神聖であり、「我」がどのような形で着飾っても、とうてい追いつくしろものではない。真の個性は、過去、現在、未来を通して変わることのないものである。

真の個性は、生命の本質的存在そのものであり、その存在理由は、本質的存在であるからである。

この、生命の本質的存在と、我すなわちエゴとをはっきりと区別していただきたい。エゴとエッセンス（本質的存在）の違いを理解できないということは、正直な自己観察をしたことのない証拠である。

この本質的存在である自己のエッセンス、意識というものが、我々の内面心に宿る多数の我、エゴにおさえつけられ、動きの取れない状態にいる。うちは、内面のラジカルな変革は、とうてい不可能なことである。

第16章 生命の書

一人の人間は、人生そのものである。死の後に続くもの、それが生命である。これが死の瞬間に頁を開く、生命の書の意味である。

この点を厳格に心理的見地からみると、我々の人生の中の一日は、実際、我我一生の小さな縮図であることがわかる。

つまり、次の事が結論として言えよう。貴方が今日この日に、自分の内部を変えようと努力しないのなら、貴方は一生自己を変革することはない、ということ。

確かに、自分を変える努力をしたいと思っても、今日この時点でそれを実行せず、明日に、あるいはひまのある時に、と言ってのばしのばしにすることは、単に計画のみであって、それ以外の何物でもない。なぜなら、今日という日に、

貴方の一生の縮図があるからだ。

俗に「今日できることを、明日までのばすな。」とよく言う。

もし貴方が明日から自分を変える努力をしようと考えたら、永遠にその努力をすることはないだろう。常に明日は存在するからである。

これはちょうど、商店の店先にある「今日は掛け売りをしません、明日はします。」という広告に似ている。

クレジットで買物をしようと思つた客が、この広告をみつけ、翌日来てみると、再び同じ広告を見出す。

これが心理学でいう「明日の病」である。明日する、明日は必ず、と言って

いるうちは、何の変化もないのである。一刻も遅らせることなく、今すぐに自分を変える努力をする必要がある。そして怠惰に未来や、ラッキーチャンスを見ることがやめることである。

今は忙しいから、何と何をしてからそれを考えましようと言う人々は、一生自分を変える努力をすることはないのであろう。これらの人々が聖書で言う「地球の住民」という意味である。

筆者は以前、強大な地主と知りあつたことがある。彼はまず大財産を作つて、

* 地ばかりを見て、天を仰ぎ見ることのない人。地球に定住して、神の王国に入ることのできない人。

それから自分を変える努力をしようと言っていた。

彼の死の間際に、筆者は彼を訪れ、「まだ大財産を作りたいと思っているのか？」と問うた。

「まったく、時間を無駄使いして、心から悔んでいる。」と彼は答えた。自分のあやまちを認めた数日後に彼は息をひきとった。

この大地主は、広大な土地を持っているにもかかわらず、さらに自分の土地を拡げて、大財産を築きあげたいという欲を持っていた。

「その日一日の努力をせよ。」とイエス・キリストは言った。これは、一生の縮図である一日の重要さを語った言葉である。

貴方が今日この努力を始めるなら、そして自分の不機嫌さや、悩みなどを観察し始めるならば、成功への道を歩み始めたのである。

正体もわからぬものを、捨て去ることはできないであろう。だから、まず最初に自身の欠点を観察する必要がある。

今日という日を知るだけでなく、自分と、その日の関係を知ることが必要である。とつびょうしもない出来事以外は、日常生活の一日ですべて直接経験できるものである。

それぞれの人が、毎日のように繰り返して使う言葉、行動などを観察するのは、大変興味深いものである。

これらの繰り返し返される日常の出来事を、さらに研究してみることが、自分自身を知る道しるべとなる。

第17章 機械的創造物Ⅱ人間

我々の人生に、一刻一刻、影響を与えている、回帰の法則は、否定できないものだ。

確かに、我々がこの世に存在している間、何度となく繰り返された出来事、意識の状態、言葉、欲望、思考、意志などがある。

自己観察をしていない人は、これらの終わることない日常の繰り返しに、まったく気づかないのは明らかである。

自分自身の内面を観察する事に、何の興味も抱かない人々は、真に自分を変えるための心理的努力をすることも欲しない。

したがって、この心理的努力をせずに、自分を変えたいと思うのは、まったく馬鹿げたことである。

各人が精神の真の幸福を求める権利を否定はしないが、自分を変えるための努力をせずに、それをつかむことは不可能だ。

日常に起こる各種の出来事に対する自分の反応を、修正することができた時に、真にその人は変わったと言える。

というのは、外的に自身の反応を修正できたということは、真剣に内的に自分を変えようと努力した結果の現れであるからだ。

まず、我々の考え方を変える必要がある。怠慢さや、投げやりな点を減らし、もつと真剣に、人生を違った角度から受け取り、その真の意味と、それに対する自分の位置を知ろう。

しかし、いつもと変わらぬ態度で、いつもと同じ間違いを犯し、いつもと同じ怠慢さで人生に向かい続けるなら、自分が変化する可能性は皆無である。

真に自分自身を知りたいと思うなら、日常生活における出来事に、どのような反応、行動を取るかを観察することから始めなければならぬ。

以上は貴方が今まで、まったく自分自身を観察したことがないのだときめつけた意味ではなく、これから一つの目的を持って、このような心理的努力を開始するのだ、ということを強調したい。

* 輪廻転生。靈魂は不滅で、転々と他の生を受けて、生まれかわる。現世は前世の制約を受け、現世は来世を制約する。

何事も、始めが肝心。日常における我々の行動を観察することから始めるのは、大変良い出発点である。

自分の寝室で、居間で、食堂で、道で、仕事場で、学校で、それらにおける日常的出来事に対し、どんな小さな事でも、それに対応する自分の機械的反応を観察すること。どんな言葉を口にし、何を感じ、何を考えるか、それらを客観的に見ることである。

しかし、ここで重要なのは観察したのち、どのように、どんな方法で、それらの自分の反応を変えることができるのかということである。もし貴方が、自分はずっと非のうちどころのない人間で、あやまちもないし、無意識に他人に害を及ぼすこともない、と信じるなら、決して変わることはできない。

何よりも、自分は機械的人間であることを理解する必要がある。自分の内部にかくれている数々のエゴ、我、にあやつられるマリオネットでしかない、ということを。

我々、一人の人間の内には、何人もの人が住んでいる。いつときとして同一人物ではないということである。時にはけちんぼうが現われ、他の時にはおこりんぼうが、また、ちよっとほめられたりすると、大変気がよく、善意あふ

れる人となり、後には手に負えない中傷的な人間になり、さらに聖人のように振舞い、そのあげくにペテン師にまでなる。

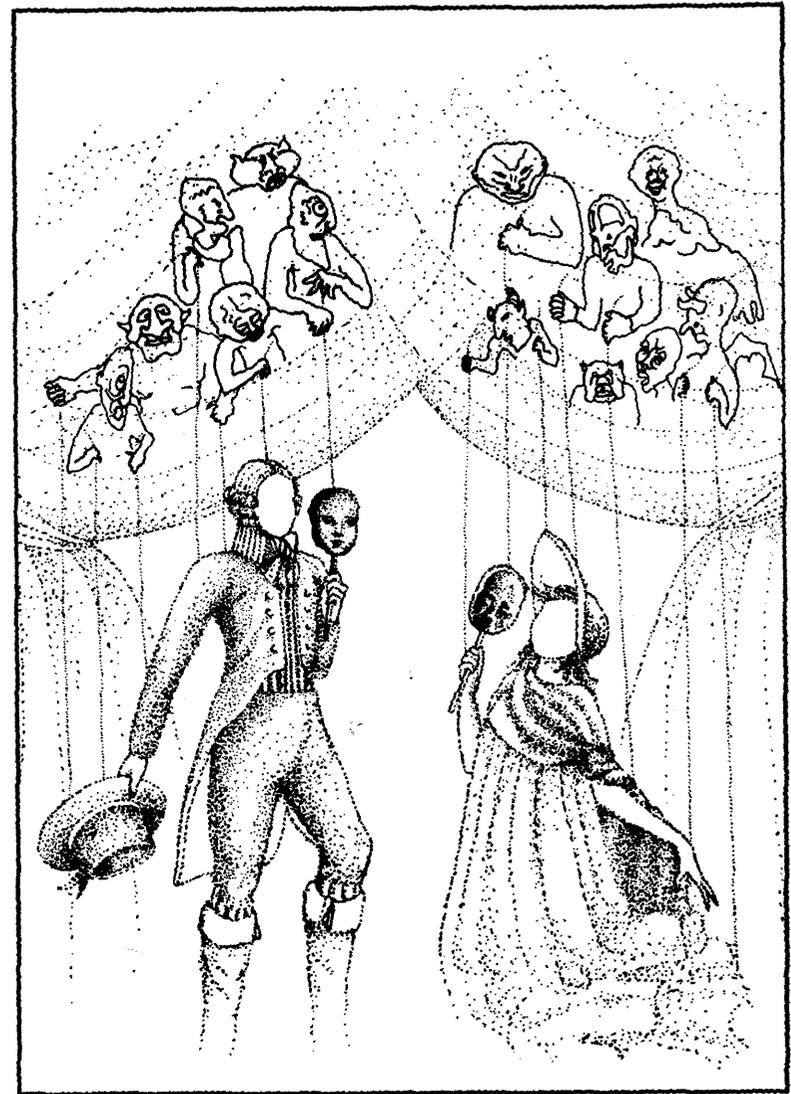
我々内部には、無数の種類の人間、つまり、あらゆる種類の我が存在する。ということは、我々の人格、パーソナリティは、機械的なおしゃべり人形、あやつり人形ではない、ということである。

それでは、それが理解できたら、まず一日の何時間か、または何分間かでも、意識を持って（つまり、機械的な言動、行動でなく、状況にそった目的と行動を自覚して）自分の身体を、自分の口を動かすことから始めよう。一日一日の、たとえほんの何分かでも、今までのような機械であることをやめることは、我々の存在そのものに、決定的な影響を与える。

自己を観察する時、エゴの欲する行動をとらなくなるということは、明らかに機械ではなくなり始めるということである。

一瞬のことでも、機械的な行動でなく、意識を持って行動する場合、数々の不愉快な状況を、自分の意志によって、よい方向に変えることが往々にしてある。

悲しいことに、我々の日常生活は、機械的に他人の言ったことを繰り返し、



仮面舞踏会

何よりも自分は機械的人間であることを理解する必要がある。自分の内部に隠れている数々のエゴにあやつられるマリオネットでしかないということ。

毎日同じ道を通って、同じことをし、同じ間違いを何度も犯し、趣味も変わる
ことなく、そしてそれ等を、変えようもしない。我々あわれな存在は、人生
の汽車が通る線路でしかない。それでいながら、自分は大いに満足している。
自分を神か仏のように信じる偏執症の人というのは、どこにでも大勢いる。
彼等は機械的な行動を繰り返し、地に落ちた人々で、多くのエゴにあやつられ
ているあわれな人形だ。このような人々は、自分を変える心理的努力など、夢
にもしようとは思わない。

第18章 超実質的な糧^{パン}

我々の人生の中の一日を、注意深く観察してみると、実際、我々は意識的に生きるということを知らないことに気がつく。

我々の人生は、まるで止まることなく、円をえがいて走る汽車のように、いつもの習慣を変えることなく繰り返す。まったくむなしく、表面的な生活である。

我々是我々の習慣を変えようと考えることもない。

習慣は我々を化石のようにする。しかしながら、我々は大変自由であると信じている。我々がおどろくほどみにくいにもかかわらず、アポロンのように美しいと信じているように。我々は機械的であり、それが日常生活において、真の感情を持つことのできない原因である。

我々の行動範囲は、昔からの古めかしい、また馬鹿げた習慣の内であり、ここでは本当の人生を生きられないのは明らかだ。生きるかわりに、植物が枯れていくように朽ちはて、新鮮な印象を受けとることもできない。

もし読者が意識を持って一日を生き始めるなら、その日は明らかに、今まで生きたどの日とも違ったものになろう。

今現在生きているこの日を、人生全体として考える時、つまり、今日すべきことを明日に残さない時、自分自身に働きかける、内的仕事^{ワーク}の真の意味を理解し始める。

ないがしろにしている一日というものは、決して存在しない。真に変わりたいたと願うなら、自分を見、観察し、理解するということを、毎日行なわねばならない。

しかしながら、自分自身の心理を観察したいという人は、まったく少数だ。自分を変えたい、自分に働きかけたいという希望を持ちながら、自分自身に次のような言い訳をして、自分の怠慢を正当化する。

「オフィスで働いている間は、自分自身へ働きかけることなどできない」と。
この言葉はまったく無意味で、馬鹿げているだけで、鈍感、怠惰、創造主への

愛の不足を正当化するにすぎない。

この種の人々は、精神的向上をいくら願っても、決して自分を変えることはできない。

自己観察は緊急であり、一刻も遅らせることなく実行することが必要である。自己心理の観察は、真に変わるための基礎である。

目が覚めた時、どんな心理状態にあるか。朝食中はどうか。いらいらしたか、もどかしがって家族にあたり散らしたか。どうしていらいらしたか、何がいつも自分に混乱を起こすのか、などと。

煙草の量を減らしたとか、食事の量を減らしたということだけが、変化をしたということではない。もちろん、ある程度の進歩の現われではあるが。悪習と暴食は非人間的であり、畜生的である。

精神的向上を願う人が、腹を出っぱらし、行動性とはかけはなれる程太っているのは望ましくない。それは、大食、暴食の象徴であり、怠惰でもあるからだ。

日常生活における、仕事、オフィス、学校などは、存在する上には必要なものであっても、意識にとっては、夢を形成するだけだ。

人生は夢であると知るとは、人生を理解したことではない。理解は自己観察により、自分自身に働きかけることにより、訪れるものである。

自己心理に働きかけるためには、毎日の生活の中で、今日現在の自分を観察することから始める必要がある。そうすれば、例の有名な主の祈り、「我等に日々の糧を今日も与えたまえ」の言葉の意味が理解できよう。

「毎日、日々」という言葉はギリシャ語で、「超実質的パン」または、「高い所から来るパン」という意味である。

ノーシスは我々の心理的な間違いを破壊することのできるパワーとアイデアという二重の栄養（パン）を与える。

一つのエゴを破壊するたびに、心理的経験をつむ、つまりそれは、大いなる知恵を、パンを食べたということであり、さらに新しい知恵を授かったということである。

ノーシスはこの超実質的な糧である、大いなる知恵∥糧を提供し、我々の心理の内部に、これから始まる新しい人生を育てる。

さて、人生を変えようということ、または存在における機械的反応を変えようということは、新しい考え、新しい方法によってのみ可能なことであり、それを

始める者は、聖なる援助も受けることができる。

ノースはそれらの新しいアイデアを与え、その操作方法を教え、それによって高い次元からの必要な助けを得ることを可能にする。

そのためにも、我々の肉体機能の下等なセンターが、高等なセンターからの周波の高いパワーを受け入れられるよう、準備する必要がある。

この仕事に卑しむべきことは一つもない。どんなに無意味だと思っても、観察する価値があり、どんな小さなネガティブな感情、ネガティブな反応でも、すべて観察されなければならない。

第19章 良き家のあるじ

この暗い時代にあつて、人生に惨敗した事実から離れるということは、確かに、大変困難なことであるが、必要不可欠なことである。そうでなければ、我々はこの人生にのみこまれてしまうことになるからである。

精神的進歩を目的として、自己の心理に働きかけることは、どのような形にしろ、すべての事柄からの隔離——正しく理解された孤立——と関係を持つ。というのは、我々の日常生活のごく普通の生き方では、パーソナリティ以外の何物をも発展させることはできないからだ。

ここで、パーソナリティ（人格）を発展させるな、と言っているのでは決していない。パーソナリティは明らかに、人間が存在する上で必要なものである。しかしながら、それは全く、人工的、人造的なものであり、我々の内なる、真

なるものでは決してないことも事実である。

間違つて「人」と呼ばれているが、実際は思考力を持つあわれな哺乳動物である我々が、もし孤立出来ずに、日常生活の出来事と、自己を同一視して、ネガティブな感情や、自意識過剰になつてエネルギーを費し、無駄口ばかりたたき、心理を教化、発展させることをしないなら、その人の内部には、真なるものは何一つ発展させることなく、ただ機械的な世界に属することのみを習得するだけである。

魂（エッセンス）を發展させようと願う人は、ヘルメティックにならなければいけない。つまり、沈黙を守るということに、密接な関係を持つ、このヘルメティックという言葉は、昔のヘルメスの秘密の教えから来ている。

もし自分の内部に、何か真実のものを育てたいと思うなら、心理エネルギーの無駄使いをさけなければならぬ。

エネルギーの無駄使いをしているうちは、その人の内面が、すべての事柄から離れ、孤立していない状態であり、そのような心理の中では、真の發展を成しとげることは、不可能である。

日常生活の波は、我々を飲みこもうとしている。それに対して、我々は流れに反して泳ぐことを習い覚えねばならない。

この仕事は普通の日常生活には反したものである。今まで毎日やってきた事とは全く異なるもので、しかも、一瞬一瞬実行しなければならぬ、これが意識の革命である。

もし、我々の日常生活にのぞむ態度が、基本的に間違つたものであれば、また、何も特別な努力をしなくても、これまでと同様に幸運に恵まれるだろうと信じていても、いずれは、そのままいからさめる時がくるであろう。

人々は、すべて計画通りに物事が進んでほしいと願う。しかしながら、残酷にも実際にはそうはいかない。もし人が内面からの変革をなし得ないのなら、結局は以前と同じ、状況の犠牲者であるだけだ。

人生について、多くの事が語られ、また書かれているが、大多数は感傷的な馬鹿げた概念である。しかし、このノーシスの心理革命の書は、それらとまったく異なっている。

この教えは人生の根源に直接ふれ、具体的かつ明瞭に、簡潔な例を持って、次のことを強く肯定するものだ。

思考力を持った動物であるこの人類は、間違つて人と呼ばれているが、実は

* Hermes キリシヤ神話の神ゼウスの子で神々の使者。ローマのマーキュリー、エジプトでのトトである。ヘルメティックとは厳重に閉ざされた、隠された神祕の意。

機械的二本足動物であり、意識はまったく眠っていると。

「良き家のあるじ」は、このノーシスの心理革命を決して受け入れることはないだろう。父親として、夫としての義務を怠ることなく、それ故に、自分を模範的であると考へる。しかしながら、このような生き方は、ただ単に、自然の流れのままに流される他の動物と変わらない生き方である。

「良き家のあるじ」であり、なおかつ、流れに流されず、人生にのみこまれまいと戦う人も、確かに存在する。しかし、この種の人々は、まったく数少ない。

この心理革命の書に示す教えにそった考へをする時、人々は人生に対する正しい見方が得られるのだ。

第20章 二つの世界

他を觀察すること、そして自己を觀察することは、まったく異なっているが、両者に共通しているのは、注意力を必要とすることである。

他を觀察する時、注意力は感覚を通して外部に向けて注がれる。

自己を觀察する時、注意力は内部に向けて注がれ、そのため、外部の物事を感ずる五感に立たない。これが己の内部心理のプロセスを觀察した経験のない新参者にとって困難な原因となる。

公式科学の実用面の出発点は、觀察しうる対象物であり、自分の心理に働きかけるこの仕事の出発点は、自己觀察、つまり自己を觀察する対象にすることである。

以上の二つの異なる出発点は、当然、異なる二つの方向に我々を導く。

公式科学の妥協を許さない理論、定説にとっぷりつかり、細胞、原子、分子、太陽、惑星、彗星などの外的現象のみを研究したすぐれた学者でも、自分自身の内部には、何の変化も起こすことなく一生を終えてしまふ可能性もある。

人間を内面的に変化させるこの種の教えは、決して外面的観察を通して成就されることはない。

我々の内部に、真の変化をもたらすこの知恵は、自己および自我を直接観察することを基礎とする。

ノーススを習い始めようとする読者に、ここで自己観察の理由と意味を述べよう。

「観察」とはこの世の機械的状况を変革する手段である。「自己観察」とは内面的変革のための手段である。

結論として、次の事が言えよう。外的、及び内的の二種類の知識が存在し、これらの知識を区別できる、マグネティックセンター^{*}がない限り、この二種類の知識が混乱を招く恐れがある。

ここで、我々の目の前に、二つの世界が拡がる。外的世界と内的世界だ。外的とは、五感で感じうる世界であり、内的とは、自己観察によってのみ感じう

る世界である。

思考、着想、感情、願望、希望、失望等は、内的であって、通常肉体の五感で感じることはないものである。

しかしながら、我々にとってこの内的世界は、目の前のテーブルや椅子よりも、リアルに、身にせまって感じられるものである。

これでわかるように、我々は外的世界より、内的世界により長く生きていると断言できよう。

我々の内的世界は、我々の秘密の世界であり、そこで我々は愛し、欲し、疑い、祈り、のろい、願望し、苦しみ、楽しみ、失望し、また報われる。

当然、外的世界と、内的世界は、体験的に区別できる。外的世界とは、五感で観察しうるものであり、内的世界は、自分の内部で、今この瞬間に自己観察するものである。

もし、地球の内的世界、太陽系の内的世界、銀河系宇宙の内的世界を知りたいと思うなら、まず自分の内的世界を知る必要がある。「己れ自身を知れ。そうすれば、宇宙を、そして神々を知るであろう。」

「自分自身」と呼ばれる内的世界を探検すればするほど、我々は二つの世界

* Magnetic center 心理的重心。磁気的中心。日常生活のすべての活動の中心となる主要点。例えば、お金のことはかり考える人物のマグネティックセンターは唯物的であり、またセックスのことはかり考える人物のすべての行動はそれを中心に広がる。理想的なマグネティックセンターとは心と精神的進化。

を同時に生きていることを理解するであろう。この二つの世界は、二つの真実であり、外部と内部という二つの範囲である。

我々が外的世界において、道を間違えぬよう、谷に落ちることのないよう歩くことを覚えたり、友人を選ぶことを習ったり、毒を飲むことのないよう、いろいろと習い覚えるのと同様に、内的世界においても、自分自身の心理に働きかけることにより、歩くことを学ばねばならない。内的世界を探索するための手段は、自己観察である。

実際、現代の退廃した人類は、自己観察という感覚が錆ついてしまっている。しかし、我々が根気よく自己観察を続けることによって、自己観察という感覚を、徐々に発達させることができる。

第21章 自己観察

自己観察は、我々が内的変化を遂げるための、実用的な手段である。

「知ること」と「観察すること」とは違う。多くの人々が、観察することと、知ることを間違えている。ある部屋のなかで、一つの椅子に坐っているということを知っていることは、その椅子を観察しているということとは異なる。

ある時、たとえば、何かの問題や心配事があった時、または疑惑や不安がある時は、ネガティブな状態にある訳だが、これは、その人が、その状態を観察しているという事ではない。

誰かを嫌っている時、感じが悪い人だと思ふ時、「どうしてか？」と問われれば、きつと貴方は、「その人がどんな人か、よく知っているから」と答えるだろう。しかし、観察してごらんさい。知るということと、観察するということ

は違うのである。間違つてはいけない。

観察するという事は、それ自体、百パーセント能動的であり、自身が変化するための手段、方法である。他方、知るという事は、受動的であり、変化するための手段ではない。

知るといふ事は、注意力を必要としていない。自分の内部に向けて注がれる注意力、内面で起こっていることに注がれる注意力、これこそが能動的であり、ポジティブである。

特に理由がなく、何となく感じが悪い人だと思ふ場合、自己観察をすることによって、自分の頭（マインド）の中にたまった無数の考えに気がつくだろう。そこでは、まったく秩序なく、あちらこちらで、しゃべったり、どなったりする声が聞こえ、それぞれの声の主が、それぞれの感情と意志を持っていることにさえ気がつく。

そして同時に、例の感じが悪い人だと思つている相手を、自分の内部で大変悪く取り扱っていることにも気づくだろう。

これらのことに気づくためには、当然、自分の内部に向けて、意志を持って注がれる注意力が必要であり、それは受動的なものでは決してない。

この注意力は、観察する側から発するものであり、その時の思考や感情は、観察される側に属する。

これらのことによつて、「知っている」ということは、全く受動的、かつ機械的な行動であり、それに対し、「自己を観察する」ということは、意識的に行なう、能動的活動であることを理解できるだろう。

機械的観察というものも存在するが、ここで言っているのは、（この種の観察ではなく）自己心理を観察するという、意識的なもので、機械的観察とは何の関係もない。

考える事と、観察する事もまた異なる。誰でも自分の都合の良いように、自分自身のことを考えることができる。しかしこれは、自分を観察することではない。

活動中のエゴを見る必要がある。我々の心理の内にそれらのエゴを育てたのは、我々自身であり、それらの内に、我々の意識の一部が存在するということを理解しなければならない。

すると、我々は次のように叫び出すだろう。「一体全体このエゴは、何をしているのだろう!」「何ということを使うのだ!」「何を欲しいと言つのか?」「ど

うして、その動物的欲情で私を苦しめるのだろうか?」「なぜ怒りでもって、私をこのような気持ちにさせるのか?」等々。

そして、自分の内に次のような事実も見らる。たえることなく続く考え、感情、欲望、情熱、喜劇、メロドラマ、悲劇、たくみなウソ、言いわけ、やじ馬根性、肉欲、などを。

よく眠る前に、正確に言えば眠りと目覚めのちょうど中間地点にある時、自分の内部に、たくさんの声を聞くことがある。それらは無数のエゴの声であり、彼等同志でおしゃべりをしているのである。そして彼等は、人がその眠りと目覚めの中間地点に至る時、その人の肉体の、それぞれのセンターとのつながりを切って、分子の世界、すなわち、四次元の世界に入るのである。

第22章 おしゃべり

自分の内部のおしゃべりが、どこから発しているかを観察する事は重要である。

この声の主の間違いが、現在および未来の我々の心理の不調和や、不快感の原因の原因である。

そして、これらのエゴが内部でしているおしゃべり——通常、馬鹿げた話や、害になる話が多い——が我々の外的世界に反映することになる。だから、これらのおしゃべり主の口を閉じる事が重要だ。

ここで言う内的静寂とは、決して抽象的なものではなく、明瞭かつ正確なものであることを、明白にしておきたい。

深い内的メデイテーション（瞑想）の最中に、意識的に考えることをストップ

プさせた時、この内的静寂に到達する。しかし、これはこの章で説明しようとする事ではない。

内的静寂に届くため^{マインド}頭を空にする、又は、雑念をはらうというような事も、この章で説明しようとするものではない。

この内的静寂を実行するという事は、我々の思考に、何も入らないようにする、という意味ではない。

ここで言う内的静寂とは、特別なものである。決してあやふやな一般化できるものではない。

我々が実行しようとする内的静寂とは、すでに自分の思考の中にあるもの、人格なり、聞いたことなりと関係があり、しかしながら、それらについてのおしゃべりをしない事、自分の内部の口を閉じるといふものである。

肉体の口のみでなく、自己の内部の口を閉じ、沈黙することを習うことは、本当にすばらしいことである。

多くの人々は、黙っているように見えても内部の口は、絶えることなくしゃべり続けて、隣人の皮をはがさんばかりのいきおいであったりする。このような、毒気に満ちた内面のおしゃべりは、その人の心理に混乱をもたらす。

このような、内面のおしゃべりを観察してみると、往々にして、半分だけ真実であったり、また、真実ではあるが、もう一つの真実と間違つて組み合わされていたり、真実に主観がプラスされていたり、肝心なことが除かれていたりすることに気がつく。

残念なことに、我々の感情は^{オートシンパシー*}自覚感というものを、その基礎にしている。

そして、さらに悪いことには、この自覚感なるものは、我意識、つまり、我の親愛なるエゴと共鳴し、エゴ以外のものには反発を感じ、果ては憎悪感まで持つ。

我々はあまりにもエゴを愛しすぎている。百パーセントのナルシストである。我々がこの我意識と同調し、その波調から脱出しないうちは、精神の発展はまったく不可能である。

まず、客観的な物の見方を習う必要がある。自分を、よその立場に置くことを、早急に習い覚えなければならぬ。

「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそれとおりにせよ。」

(マタイによる福音書 七章12)

この種の勉強をするうえで、本当に重要なことは、貴方が内的に、または肉

* Auto-sympathy 自分と互いに感じ合うもの、共鳴するもの、波調の合うもの。



内的静寂を妨げるエゴたち

眼で見えない所で、他人をどのように扱うか、ということである。
 見かけは大変慈悲深く見える人こそ、実は、毎日隣人を自分の秘密の心理の
 洞穴へとひきずりこみ、ののしったり、いやがらせをしたり、あざ笑ったりす
 るものである。

第23章 関係の世界

関係の世界には、明白にしなければならぬ三つの異なった見地がある。

第一Ⅱ我々はこの地球に持つ身体、すなわち肉体と関係を持つ。

第二Ⅱ我々は地球上に住む、したがって当然、地球の外的世界と関係を持つ。

同時に、家族、仕事、金銭、学校、政治問題等と関係を持つ。

第三Ⅱ我々は人間として、自分自身との関係を持つ（大多数の人にとって、この関係はまったく重要なことと考えられていない）。

一般に、第一、第二の関係には興味を持つが、残念なことに、第三の関係については、その意味さえも理解されていない。

食、健康、金、仕事、等々、これらが、間違つて「人」と呼ばれている「理性ある動物」が最も心配することである。

さて、ここでもう一つ明白にしておきたいのは、肉体とはやはり自分自身にとっては、外的世界に属するということだ。

この地球人の身体、肉体は時には病み、時には健康である。

我々は肉体について、十分な知識を持っていると信じている。しかし実際は、この肉と骨からなる肉体について、最も著名な科学者でさえ、よく知っているとは言いがたい。

複雑な組織からなる肉体は、我々の理解できる範囲を越えるものであるという事は明らかだ。

第二の關係に関して言えば、我々は常に環境の犠牲である。我々は残念ながら、未だに意識を持って環境を変えることを習ってはいない。

何事にも、また誰にも順応する事のできない人々、人生で真の成功を納めることのできない人々は、数知れない。

このノーシスの「心理に働きかける仕事」の見地から自分自身を見た時、三つのタイプの關係のうち、自分にどれが不足しているか見きわめる必要がある。

具体例としては、肉体と良い關係を持っていないということも起こりうる。その結果として、病氣を持っているということである。

また、外的世界との関係が良くないということもありうる。結果としては、社会問題、経済問題、またいさかいなど起こりやすい。

自分自身との関係が良くない時は、その結果は内的光の不足^{*}によって、大変苦しむことになる。

もし寝室の電気が、コンセントにつながっていないければ、当然、部屋の内は暗闇であろう。

内的光の不足で苦しむ人々は、思考を、魂の高等センター^{*}のコンセント^{*}になぐ必要がある。

我々は地球人の身体（肉体）と良い関係を持つことはむろん、外的世界とも良い関係を保ち、そして自分自身の精神全体とも良い関係を持つ必要がある。

悲観的な病人は、多くの医者と薬にあきあきし、回復の希望を失ってしまふ。楽観的な患者は、生きるために病と戦おうとする。

モンテカルロのカジノでは、億万長者でありながら、一日のうちに無一文になったため自殺する者もいれば、空腹を訴える小さな息子のために食物をあさる母親もいる。

精神力と内的光が足りないため、自己心理に働きかけることのきびしい仕事^{ワリク}

をあきらめる初心者が数多い。逆境を利用して学び、そこから立ち直る方法を知る人は数少ない。

過酷な誘惑、衰弱、荒廃の時こそ、自分自身を思い出す、観察する手段に頼らなければならぬ。

我々一人一人の心の底には、アステカ人の呼んだトナンツイン^{*}、ステラ・マリス^{*} (Stela Maris)、エジプトのイシス^{**} (Isis)、仏教の観音で表わされる聖なる母が存在し、我々の痛んだ心をいやそうと、常に待っていてくれる。

自分自身の内で、常に自分を忘れずにいるというショックを与える時、今までに経験した事のないような奇跡的变化を起こす。そしてそのために、自分の細胞は、今までと異なった意識を吸収することになる。

* ノーシス（観智）または直観的認識を通してのみ得ることのできる精神的光明。

「激流に押し流されてはいけない。逆流を利用し、救済の港に至り着くことのできる者はそこに錨を下ろし、おまえたちをノーシス（知識）の門へと導く案内人を探すがよい。そこには闇から清められた輝く光がある。」（ヘルメス書より）

* * 五つのセンターのうち二つは高等センターを持つ。合せて七つのセンターとも言う。

1 高等思考センターは知性（インテリジェンス）とのつながりを持ち崇高な知性と我々を結びつける。

2 高等感情センターは高次のな純粹な感性を我々に伝える。

* Tonantzin 我々に光を与える母の意。古代アステカの蛇の形をした女神。

* * 海の星、水の母。

* * * 古代エジプトの宗教の最高の女神。頭に太陽円盤をはさんだ牛角をのせている。天の神ヌートと地の神ゲアの娘。兄オシリスの妻。大母神としてのイシス崇拜は、エジプトを始め、ギリシャ、ローマにも伝わった。オシリス・イシス・ホルスの三位一体を形成する。女性原理。

第24章 心理の歌

ここで、我々にはいわゆる「内的考慮」というものを熟考すべき時が来た。エゴを考慮するということは、破壊的なことだということに疑いの余地はなく、その上エゴは、我々に多大のエネルギーを費やさせ、我々の意識を催眠状態に追いこむものだ。

自分自身とエゴとを同一視するという間違いを犯さなければ「エゴ考慮」や「自意識過剰」ということはあり得ることではない。

自己とエゴとを同一視することは、自分をあまりにも愛し過ぎ、自分をあわれに思い、自分に思いやりを与え、あまやかし、自分はこんなにも他人に親切で、何も悪いことはしないのに、誰も自分の長所を認めてくれない。善人は他人に認められないものだ、そういう他人は悪者ばかりだ、という結論に達する。

この自意識過剰の一般的な表現としては、次のようなものがある。常に自分に対する他人の考えを気にかけるということだ。こんなことを言ったり、したりしたら、他人にどう思われるだろうか、という心配である。

こんな時に、この種の無意味な心配による多大なエネルギーの喪失を、我々が気づかずにいるのは、まったく興味深い。

自分に対して、何の害もおよぼさない人に向ける敵意あふれる態度も、往々にしてこの自意識過剰の心配から生まれるものである。

このような状況にある時、自意識を奨励し、エゴを考慮すると、多数のエゴ達は弱まるどころか反対に、ますます強さを増し、驚ろくほど増長する。

自分をエゴと同一視する時、エゴは自分の状態をあわれに思い、その上あらゆることの勘定まで始める。

例えば友人の誰それには、あれ程つくしたのだから、彼は自分に借りがある。上司の誰それは、自分の仕事を認めず、自分に借りがある。親戚の誰それは、また近所の誰それは等々。それらの貸借勘定にエネルギーを費やし、彼をとりまく周りの人々にとって彼は我慢のできないほど退屈この上ない存在となる。

この種の人とは、正直に話し合うことさえもできない。なぜなら、どんな会

話でも、彼の貸借勘定と、大げさな苦しみのぐち話ばかりになることは間違いないからである。

ノーススを学ぶにあたつて、頭に入れておかなければならない事の一つは、他人を許すことを知ることによって、自己の心理の浄化が可能であるということである。

もし、毎日毎日を誰それにいくら貸しがあり、誰それは私にこんなことをし、あんな苦しい思いをさせられたなどと、いつでも同じ歌を歌って苦しんでいる人の心の内には、何も育つものはないであろう。

主の祈りの中には、「我らに罪を犯す者を、我らが許すごとく、我らの罪も許したまえ」とある。

自分は他人に貸しがあるとか、他人のせいであつたとかの感傷は、精神的進歩を妨げるものである。

「あなたを訴える者と一緒に道を行く時には、その途中で早く仲直りをしなさい。そうしないと、その訴える者はあなたを裁判官にわたし、裁判官は下役にわたし、そして、あなたは獄に入れられるであろう。」(マタイによる福音書 五章25)

「よくあなたに言っておく、最後の「コドラント」を支払ってしまうまでは、決してそこから出てくることはできない。」(同26)

もし我々に、貸しがあるとしたら、我々も誰かに借りている。もし誰かに、最後の一銭まで支払えと主張するのなら、その前に、我々が最後の銅貨まで支払わなければならない。

これが「タリオの刑」(反坐法)である。「目には目を、歯には歯を」は、馬鹿げた悪循環である。

他人が我々に何か悪いことをしたからと言って、他人に弁解を求めたり、侮辱したりするという事は、いくら自分は温和な人間で、何も悪いことはしていないと信じていても、我々自身にも必ず同じことが起こるといふ事だ。

自分を、不必要な法則に従わせるのは、馬鹿げたことだ。他の新しい影響下に自分を置くことが、より望ましいことである。

たとえば、慈悲の法は、乱暴な人間の法、「目には目を、歯には歯を」より、ずっと崇高な影響を与える。

ノーススのエソテリック・ワーク(奥儀的仕事)のすばらしい影響下に、我自身を置くことは、緊急かつ必要欠くべからざることである。貸しがあるこ

* Talio 同害報復。攻撃を受けたのと同じ罰を与える。古くはバビロニア法以来イスラム法に多くみられる。

とは忘れ、我々内部の心理から、それらすべての自己配慮をなくすことである。我々の心理には、決して、報復、恨み、被害者意識、暴力、羨ましがり、忘れることのない貸借の記憶等の、ネガティブな感情を入り込ませるべきではない。ノーシスは真に働きたい、そして変わりたい、変えたいと望む人々のためのものである。

他人を観察する時、各人はそれぞれの歌を持つことに気づくだろう。

それぞれの人が、それぞれの心理の歌を歌っている。すなわち、誰それに貸しがあり、自分は不幸であるという、自己配慮の、いつもと同じ文句の歌を、心理の歌を歌っている。

時に人々は、あおり立てられることもないのに歌い、また時にはアルコールが少し入った時に、大声で歌ったりする。

この退屈な歌は、消さなければならぬ。この退屈な歌は、我々を内面的に型にはめ、不能にするばかりか、我々から多大なエネルギーを奪うのだ。

このノーシスの心理革命において、歌の名手とは——美声であるとか、実際に声を出して歌うことを言っているのではない。——常に過去の世界に生き続け、現在いる位置から一步も前進できない人をいう。

どうしても、この心理の歌を忘れることのできない人は、精神のレベルを改革させることができず、今いる位置から動けない人である。

精神のレベルの上昇には、まず、現在の自分の在り方を辞めることが正しい。自分の在り方を改めるのだ。

いつも同じ考え方であり続けるのなら、精神のレベルのステップを、一段上げる事は決してできない。

実生活においても起こる事だが、ある人が友人に、自分の心理の歌を歌ったという理由だけで、二人の友情が終わることがしばしば起こる。それは、不幸にも、その友人が歌い手に、黙れとか、レコードを変えろとか言った時に、終わりをつけるのである。

他人を理解するには、まず自分自身を理解するのが正しい筋道である。歌のうまい歌手は、さも自分を理解していると信じきっているものである。

他人に理解してもらえないという、失望の歌を歌い、自分が注目のまとなる、すばらしい世界を夢見る歌手は数多い。

しかしながら、すべての歌手が観客の前で歌うわけではない、まだ埋もれた歌手もいるわけで、人前で歌いはしないが、こっそりとプライベートに歌って

いる。

この種の歌手は、ほとんど働きずくめで苦勞をし、人生は失敗し、手に入れることのできなかつた物すべては、自分が他人に貸していると考える人々である。

どうしようもない悲しみを内部に秘め、同時に、やり切れないほど退屈で、無氣力感、精神的疲勞感、失望感等を中心として、いろいろな考えが寄せ集まっている歌である。

これらの秘密の歌は、我々の精神の実現への道の扉を閉ざしてしまうことは、疑う余地もないことだ。

往々にして、これら内部の秘密の歌は、意識的に觀察していない限り、自分でも気づかぬうちに歌っていることがよくある。

自己觀察をする。自己觀察によって、自己の内部の奥深くまで光をあてて、明らかに自分の目で確認しない限り、内的変化は不可能だ。

觀察は一人である時と同様、他人との関係、反応等によっても觀察する必要がある。

一人でいる時には、他人といえる時とは異なつたエゴ、考え、ネガティブな感

情等が現われてくる。

物理的に一人でいる時でも、まったく孤独の中にもありながらも、無数の存在（エゴ）が取りまいてる。一人でいる時にこそ、ネガティブな危険なエゴ達が、すぐ隣りにいるものである。

我々が真実、ラジカルに変わりたいと望むなら、我々自身の苦しみを犠牲にする必要がある。

我々は往々にして、苦しみを、不明快な、退屈な歌の中に現わすものだ。

第25章 回帰と反復

人間一人は人生そのものである。もし、その人が内面的に何の変化もしないのなら、人生をラジカルに変えることがなかったら、そのために、自分自身に働きかけることを何もしなかったなら、その人の人生は、あわれに時間の無駄使いをしているだけである。

死とは新たにもう一度、同じ事を繰り返す可能性を持つ、出発点への回帰である。

オカルト的文献で、前世とか、連続的の人生について多く書かれてきたが、ここでは連続的存在について述べてみよう。

我々一人一人の人生は、それぞれ連続する存在内にあつて、常に同じ年代に、同じ事を繰り返すものである。肉体と時代は、毎回異なりながら、何世紀とい

う長い時間を通じて、まったく同じ事を繰り返す。

明らかに、我々は子孫の遺伝子の中に続いていることは、すでに証明済みのことである。

各人はそれぞれ人生の映画フィルムを持っていて、それを新しく誕生した存在という画面の中に再び映し出す。

悲劇、喜劇のドラマを繰り返すことは、反復の法則の公理である。

それぞれの転生の中で、常に同じ状況が繰り返される。これらの、常に同じ舞台に出演する役者は、我々内部に住むエゴ達である。

だから、もし我々がこれらの役者達——我々の人生の中で繰り返される芝居に出演するエゴ達——を崩壊させてしまえば、当然それらの状況の反復は不可能となる。

役者なしの舞台はあり得ないからである。

このようにして、我々は、回帰と反復の法則から解放されることが出来る。

これが真の意味で自由を得ることである。

我々の内部に住む、これらの役者達（エゴ）の一人一人は、毎回同じ役を演じる。この役者が死んでしまえば、（代役はいないので）舞台の幕が閉じるのは



仏陀の誘惑



サンアントニオの誘惑

エゴの死によって真に目覚めたとき、己の意識の客観性、悟り、幸福を手に入れることができる。

明らかだ。

このような、回帰と反復の法則について、もう少し深く考えてみよう。自己観察によって、この問題の持つ秘密の弾力性を発見することができる。

例えば、前世の人生で二十五歳の時に恋愛をしたとする。すると、新しい今回の存在においても、二十五歳になった時、その約束を持つエゴは、再び例の夢想の相手を捜す事は明らかである。

相手の女性の方も、前世の人生において、アドベンチャーの時、十五歳だったとすると、新しい存在においても十五歳になると、例の冒険的エゴは、その同じ相手を捜し始める。

ということは、彼のエゴと同様に、彼女のエゴも、精神感應で相手を捜し始め、前回と同じような冒険を繰り返すために、新たにめぐり逢うという事が理解できよう。

前世において、死ぬまで争った敵同士は、現世においても、同じ年代にその相手を捜し求める。

前世で四十歳の時、不動産のことで争った二人は、現世でも同じ事を繰り返すため捜し合う。

我々の内部には、このように前世からのたくさんの約束を持つ多数の人（エゴ）が住んでいる。これは反論の余地ないことだ。

盗人はその内部に、各種の盗みの約束を持つ多数の泥棒の住む洞穴を持ち、人殺しはその内部に多数の人殺しクラブを持ち、セックスマニアはその内面心理に、売春宿まで持っている。

しかしここで重大なのは、我々のインテレクトは、内部のたくさんの住民の存在も、そしてそれらの住民の約束が、次々に果たされていくことも、気づかないということである。

我々の内部に住むエゴの約束は、我々の理性の届かない、もっと深い所で起きている。これらは、我々の潜在意識という意識内での出来事であり、我々自身に起こっていることながら、気がつかないでいるのだ。

よく言われるように、もの事が我々に起こるのである。雨が降ったり、雷が鳴るように。実際我々は、何かをしたいという夢想を持っているにしても、我々のする事は無であり、我々が何かをしていることでも、起こしていることでもない。これは致命的であり、機械的なことだ。

我々のパーソナリティ（人格）とは、それぞれのエゴが、自分の約束を果た

すために利用する道具でしかない。

我々の認識能力の届かない所で、たくさん事が起こりながら、多くの場合、我々は理性の外で起こる事に、あわれにも気づかないのは残念なことだ。

我々はたくさん知識を持っていると信じているが、実際は我々が知らないという事さえ知らないでいる。我々はこの人生という大海の、荒れ狂う波に飲みこまれる、みじめな板きれである。

この不運、この無意識状態、この悲しむべき状況からぬけ出すことは、エゴの死によってのみ可能である。

死なくして、どのように目覚めることができようか！死によってのみ、新しいものが誕生する！胚芽が死ななければ、植物は生まれえない！

死によって、真に目覚めた時、己の意識の客観性、悟り、幸福を手に入れることができるのだ。

第26章 幼児の意識

我々の意識のうち、九七パーセントは潜在意識であり、意識として働くのは、三パーセントである、ということによく言われている。

すなわち、我々の持つエッセンス(魂)の九七パーセントは、「私自身」を形成するそれぞれのエゴ達によって、ビンづめにされ、押しこまれている。

そして、それらのビンづめにされたエッセンス(魂)、またはコンセンサス(良心)は、行動を妨げられている。

どのエゴでも、崩壊したなら、意識の何パーセントかを自由にする。魂、または意識の自由化は、それぞれのエゴの崩壊なしには不可能だ。

エゴ崩壊率が高ければ高いほど、意識自由化率も高い。エゴ崩壊率が低ければ低いほど、意識の目覚めのパーセンテージも低い。

意識の目覚めは、エゴの崩壊によってのみ可能である。現在、そしてこの時点において、エゴに死を与えることである。

魂、または意識が我々の内部に住むエゴ達によって押しこめられている間は、これらは動きがとれないで眠っている。すなわち、潜在意識の状態にいうことである。

潜在意識を意識に変えることは、緊急であり、これはエゴの崩壊によってのみ可能となる。すなわち、エゴに死ぬのである。

エゴに死ぬことなしに、目覚めることはできない。いやそんなことはない、まず最初に意識を目覚めさせ、その後死ぬこともできると考える人々は、自己の真の体験を理解することができず、結果的には間違った道を歩むことになる。

生まれたばかりの赤子^{あかこ}はすばらしい、その時点では、意識はトータルに目覚めている。

生まれたばかりの子供の肉体内には、新たに肉体に入ったばかりのエッセンスが存在し、それが赤子の美しさの理由である。

しかしながら、意識の一〇〇パーセントが、この小さな肉体で目覚めている

わけではない。エゴによってピンづめにされていない、三パーセントの意識が自由でいるということだ。

このたった三パーセントの自由なエッセンス(魂)が、赤子の肉体組織に入った時、完全な自己意識、魂の輝きを与える。

大人はこれらの赤子を、生まれたばかりでまったく無意識であると考え、憐れんで見る、しかしそれは、間違いである。

赤子は大人の真実を見ぬく、大人の意識が眠っていることも、そして意地悪い人だということも。

生まれたばかりの赤子のエゴは、その肉体の回りを回ったり、行ったり来たりして、いつこの新しい肉体に入りこもうかと、そのスキを狙っている。しかしながら、幼児はまだパーソナリティを作っていないので、いくらエゴが入りこもうと試みても、それは無駄である。

時には、赤子はこれらのエゴが自分に近づくのを見てびっくりし、泣きさけんだりすることがある。しかし、大人は子供がどこか悪いのか、お腹がすいているのかと考える。これは大人の無意識の表れだ。

新しい人格が形成されていくに従って、前世から持ってきたエゴ達は、新し

い肉体を住み家として、少しずつ侵入していく。

すべてのエゴ達が肉体に住みつくくと、我々は、各人を特徴づける欠点や、醜さを持つようになる。そうすると、我々の意識はまったくピンづめにされ、我は無意識で、邪悪な、またはロボットのようになり、機械的な行動をするだけとなる。

肉体が死んで墓場に行くのは、次の三つのものである。(1)肉体、(2)生命体バイタルボディ(肉体に有機的生命を与えるもの)、(3)パーソナリティ(人格)

生命体は肉体が腐り果て、土に返るように少しづつ消え果てる。

パーソナリティは潜在的エネルギーで、墓から出たり入ったりする。親戚が花を持って行くと喜び、家族に未練を持つ、しかし、このエネルギーも、少しづつ宇宙の土ぼこりとなり消える運命にある。

しかし、墓よりも、肉体の死よりも後まで続くものがエゴであり、複数化したエゴ、つまり私自身というこの多くの怪物は、時が来るともどってきて、再び新しい肉体内に入りこみ、魂をまたは意識をビンの中に押しこめてしまふ。

幼児がパーソナリティを形成するに従って、エゴも同時にその中に入ってしまうのは、まことに残念なことである。

第27章 収税吏と偽善家

我々が地に足をつけ、その土台を理解するために、人生におけるいろいろな状況について少し考えてみよう。

すなわち、我々は社会的地位を土台とするか、また財産、名声、肩書等を土台とするかということである。

最も興味深いのは、誰もが、金持だろうが乞食であろうが、すべての人は、すべての人々を必要とし、たとえ虚栄心に満ち満ちていようが、他人の力を借りて生きているということである。

ここで、何が必要であるか考えてみよう。血を流す暴力的な革命での我々の運命はどんなものであろう、そこに足をつけていた土台はどうなるのであろう。憐れな我々は強いと信じていても、実際はおどろくほど弱い者である。

* Vital body 肉体をささぐる内的な構成。その成分はエテリック(靈氣的)で、肉体の有機生命を維持している。東洋医学の経絡やつばは、この生命体のエネルギー流通経路にあたる。

もし、真に精神の平和と幸福を願うものであれば、その土台に足をつけて立っているエゴを崩壊させなければならぬ。

これらのエゴは他人を過少評価する。そして、常に自分の方が優れている、自分の方が完全である、自分の方がもっと金持だ、自分の方が頭が良い、自分の方が人生の経験がある、等々と考える。

イエス・キリストが二人の祈禱者について次のように話したことがある。

「ふたりの人が祈るために宮に上った。パリサイ人は立って、ひとりてこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのように貧欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食をしており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとしないうで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしく下さい』と。あなたがたに言うておく。神の義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。」(ルカによる福音書 十八章10-14)

他人といつも比較して、自分の方がまだましだ、自分の方が公平だ、自分の

方が物知りだ、自分の方が美徳家だ、自分の方がより人生経験がある、より責任感が強い、などの考えが存在するうちは、自分自身がいかにか何の価値もない、みじめな存在であるかを認めることは不可能である。

この種の優越感のあるうちは、針の穴を通ることは不可能だ。すなわち「富んでいる者が神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」(ルカによる福音書 十八章25) という教への通りである。

私の大学は一流大学で、同僚の卒業した大学は二流であるとか、私の信じる宗教は、唯一の真の宗教で、他はすべて邪悪であり、真実ではないとか、誰それの奥さんは醜女だが、俺の女房は美人であるとか、彼は酒飲みでたちが悪いが、俺はそんなことなく、賢明で、禁酒家である等々。これらの優越感、我々をして聖書でいうところの「金持」にならしめている。

自分がどのような土台に足をつけているのかを知るために、一瞬たりともおこたらず、自己観察する事が緊急である。

ある時、他人の言った事で、思いがけなく感情を傷つけられる。その時に、その瞬間に自分の心理的土台を、発見するのである。

この心理的土台(基礎)が、キリスト教の福音書で言うところの「砂地の上

に自分の家を建てた。」ということである。

他人に優越感を感じる時、肩書や、社会的地位や、経験や、金額や、外見等によって自分の方が、優れていると感じる時、それらを注意深く観察し、書きとめておく必要がある。

自分の方が、何らかの理由で優れていると感じるのは、重大な間違いである。この種の人々に、天国の扉は閉ざされている。

自分がどんな時、一番うれしいか、どんな時、見栄を満たされた感じがあるかを発見することである。それによって、我々がどんな基礎に支えられているかを見ることが出来る。

しかし、この自己観察は決して理論的なものではない。実行しなければならぬものだ。一瞬一瞬、自己と我とを直接観察するものである。

そして読者が、いかに自分は無力で、みじめな存在であるかを理解し、そのたわごとのうぬぼれを放棄し、他人に優越感を感じるために、いかに多くの肩書や、名誉や、むなししい優越感を必要としていたかを発見する、その時こそ、自分が変わり始めたという、間違いない証しである。

私の家、私の金、私の財産、私の仕事、私の地位、私の趣味、私の教養、私

の芸術感覚、私の知識、私の名声、等にしがみついているかぎり、変わることはできない。

「私の」にしがみつ়くことは、我々の無力さみじめさを認める邪魔となる。火災や難破などの光景によくあることだが人々が慌てふためいて、われを忘れ他人に笑われるような価値のない物ばかり持って逃げだすのを見て、おどろくことがある。

可哀想な人々よ、何の価値もない、つまらない物に未練を持ちしがみつ়く。自分自身を、外的な物質のみで判断したり、それらに支えを感じる事は、まったくの無意識状態にいる事と同じである。

真の魂の感情を持つためには、これらのエゴ達を崩壊させない限り不可能だ。しかし、残念な事にエゴ崇拜者達は、これを受け入れようとしなない。彼等は自分を神でもあるように信じ、パプロ・デ・タルソンの言った「栄光なる身体」を持つと考え、我こそ神聖なるものだ、というこの間違った考えを、頭から離そうとしない。

この種の人々には、まったく手がつけられない。説明しても理解せず、すでに砂の上に家を建ててしまつて、その砂を守ろうとする。そして、自分の都合

* Paulos de Tarse シシリア島タルソ生まれの聖パプロ。キリストの使徒の一人。原始キリスト教を伝道し、迫害され、殉教した。新約聖書に「彼は（キリスト）は万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであらう」（ヒリピン人への手紙第三章21）とある。

や必要に応じて、彼等は自分勝手な定義づけをする。

これらの人々が、真剣に自己を観察するならば、自分自身でその内部に存在する、複数のエゴを発見し、証明するであろう。

これらのエゴが、我々の代理人として、感じたり考えたりしているうちは、どのようなにして我々の真の精神の感情が表現できるであろうか。

この悲劇において、最も重大なことは、「いや私は自分自身で考えている、自分自身で感じている」と信じて疑わない事である。しかし真実は、他人が（エゴが）我々のいためつけられた頭の中で考え、我々の傷ついた心で感じているにすぎない。

不幸な我々は、何度人を愛していると信じてても、実際は自分の内にある、性的情熱に満ちたエゴが、我々の心を悪用しているのである。不幸にも、動物的情欲を、愛情と間違えている。我々自身のパーソナリティの内部には、その混乱を利用し、悪用する者が潜んでいるのだ。

「神よ感謝します。なぜなら私は他の人のようではないからです」云々という、例の聖書にある偽善者の言葉を、我々全員は口にしたこともない、と考えている。

しかし、信じがたいかも知れないが、実際我々は、毎日この偽善者のようにふるまっている。

市場の肉屋は「うちは他の肉屋のように質の悪い肉を高く売ってもうけてはいない」と言う。

呉服屋は「私は他の商人のように、長さを計る時ごまかして、もうけてはいない」と言う。

牛乳売りは「私は他の牛乳屋のように、水増しして量を増やすような事はしない。私は正直だ」と言う。

主婦は「私は誰それさんのように、他の男と浮気したりしない。私はおかげさまで、正直で、夫につくすいい妻だ」と言う。

結論として、他人は悪く不公平で、不義で、泥棒で、邪悪であり、自分は他人に何の害も与えず、模範的存在で、聖人のようで、教会にでも祭ってもらって、おさい銭を投げてもらうのにふさわしい、と考える。

我々は、何としつこいのだろう。人々はこの書を読んで、「いや私はそこまで考えない。適当に善人で、適当にいたずらもして、だからこそ俗人として、これほど良い俗人はいないのだ」という結論に達する。そして残念な事には、

自分の都合の悪い事は、思い出すこともしない。

しかし、毎日の生活の中で、マインドが、何の心配事もなく休養する不思議な瞬間がある。この瞬間、マインドが静かな不動の状態にある時、我々に新しい事柄が訪れる。

マインドが、深い精神的休養状態にある時、我々が家を建てた土地が、いかにくずれやすい砂地であったかという真実を、体験的に悟る事ができるのだ。

(マタイによる福音書 七章24—29基礎についてのたとえ話をさす)

第28章 意志

「偉大なる作業」^{グランド・オペラ}とは、まず何よりも、意識ある仕事^{ワーク}と、自主的な献身を基礎とした、自分自身による「人」の創造^{クリエーション}である。

「偉大なる作業」とは、自分自身の内に潜む、創造主から与えられた真の自由を獲得することである。

我々が、本当に意志の解放を望むなら、我々自身の内部に住む、複数のエゴすべてを緊急に壊滅させる必要がある。

ニコラス・フラメル^{*}、ライムンド・ルリオ^{*}は、貧しくありながら、彼等の意志を解放し、人々を驚かせる数多くの行ないを実行した。

アグリ^{***}は「偉大なる作業」の第一段階までしか実現できず、自分自身の真の独立を手に入れるため、彼の内面に住む多数のエゴの壊滅のために戦いなが

* Flamel Nicolas (1330—1418) フランスの錬金術師。ユダヤ人アブラハムという錬金術師のものとされる謎の象形文字の本の解説をしたことが知られている。「賢者の石」を発見し、単金属から貴金属(黄金)を作った。

* Julio, Raimundo (1235—1315) スペイン人哲学者、錬金術師。パリで哲学を教え、イスラム教徒達にキリスト教を宣教した。ヘルメスの秘密の教えに通じた偉大な錬金術師で、多くの著作を残した。

*** Agrippa (1486—1535) ケルン生まれ。パリの錬金術師グループに属し、神学を研究する。リヨンの宮廷に医者として仕え、同時に占星術師としても知られる。魔術師、カバリストとしても知られている。

ら、苦しみのうちに死んだ。

意志の完全なる解放は、火、空気、水、土の絶対的コントロールを確かなものとする。

以上の記述は、現代心理学を学ぶ多くの学生にとって、解放された意志の至上のパワーに関する、あまりにも誇張したものの言い方と思うであろうが、聖書には、モーゼの行った数々の驚異が記されている。

フィロン^{*}によると、モーゼはナイル川沿いのファラオ^{**}の国で奥儀に通じた人であった。オシリスに仕える僧、ファラオの弟子でもあり、彼は、聖母イシスと、秘密に存在する我々の大いなる父オシリス^{***}の寺院で教えを伝授した。

モーゼはカルデア（バビロニア南部古代地名）の偉大な魔術師である、開祖アブラハムの子孫でもあり、尊敬すべきイサク^{***}の子孫でもあった。

モーゼは、意志の電気^{エレクトリックパワー}力を解放させ、それによって、驚くべき天与の才を所有した。この事実は、神々の世界においても、人間の世界においても、周知の事実であり、そのように書にも記されもしている。

モーゼ、このヘブライ人の首領に関して、聖書に書かれていることは、真にすばらしく、驚くべきことだ。

モーゼは杖を蛇に変え、自分の手をらい病患者の手に変えて、また後にはそれ等をもと通りにした。

燃え立ついばらの茂みの例の試練^{*}の結果が、彼のパワーを強固にした。人々は、それを理解し、彼の前にひざまづいて従ったのである。

モーゼの使う魔法の杖は「生と死の奥儀を伝授した」聖職者のまことのパワーの象徴である。

ファラオの目の前で、モーゼはナイルの川の水を血に変える。すると魚は死に、聖なる川は汚され、エジプト人達は、その水を飲むことができず、ナイル川流域の灌漑用水もすべて血となった。

それだけではない。モーゼは怪物のような巨大なカエルを川から出現させて、民家にまで侵入させる。その後、彼の自由な意志によって命令し、これらの不吉なカエルをすべて消したのだ。

しかし、これだけのことを示しても、ファラオはイスラエルの民に自由を与えないので、モーゼは新たな奇跡を示す。土地を汚染し、むかつくような、きかないハエの大群を誘発する。そして、それらをまた消す。

恐るべき疫病の発生である。ユダヤ人以外の信徒達は、すべて死におののか

* Flon de Alexandria (20BC - 54AC) アレキサンドリア生れのユダヤ系ギリシヤ人哲学者。

** Pharaoh ヘブライ語の「大きな家」に由来し、ソロモンの時代までのエジプト王の称号。

*** Osiris 古代エジプトの神。不滅の生命力の現われであり、善と生産力との神。オシリスと妻イシスの物語として伝えられる。

**** Abraham, Isaac イスラエル民族の始祖。BC二千年頃の人。『旧約聖書』創世紀に記述されている。アブラハムは「多くの人の父」の意である。イサクはアブラハムとサラの間に神の約束の実現として生れた息子である。

される。

聖書によると、モーゼが釜のススを手に取り、それを空中に投げると、そのススが落ちてふれたエジプト人達には潰瘍ができたという。

また、例の有名な魔法の杖を空中にあげ、空からヒヨウを降らせる。このさまざまのヒヨウは、多くのものを破壊し殺す。続いて火の雷を落とす。雷は恐ろしい音をとどろかせ多量の雨を降らせる。そしてその後、モーゼは以前の静寂を取りもどさせる。

しかしながら依然としてファラオは、自分の意志を変えようとしなない。そこでモーゼは、彼の魔法の杖で大地をたたき、またたく間にいなごの大群を出現させた。そのあまりにも多くのイナゴで、空は暗くなるほどであった。彼がもう一度杖でたたくとすべては、もとにもどる。

この旧約聖書のドラマの終わりは、よく知られているように、エホバが干渉し、エジプト人すべての長男を殺す。するとファラオは、しかたなくヘブライ人達を自由にする。

その後モーゼは、魔法の杖で紅海の水を割り開き徒歩で渡る。イスラエル人達を追って来たエジプトの兵達が近づくと、モーゼは紅海の水をもと通りに閉

じさせ、彼らは海にのみこまれてしまう。

多くの密教修行者や超能力希望者達は、このような話を見たり聞いたりすると、自分達も同じような力を持ちたいと願うのは当然である。しかし、我々の内部の心理に、エゴが存在し、それらが自己の意志を押えている間は不可能である。

多くのエゴ達にビンづめにされている魂は「アラジンの魔法のランプ」の自由を夢見ている魔人である。この魔人が自由の身になった時、奇跡を行うことができる。

エッセンスは「意志―意識」であり、それは残念ながら我々自身の現状の、悲しむべき状態ゆえに制限されている。

意志が自由になった時、その時こそ、宇宙の意志と一体となり、混ざり合い、そして同時に、自主的なる力となる。

宇宙の意志と合体した個人の意志は、モーゼの行ったごとく、数々の奇跡を行うことができる。

我々の行動には三種類がある。

1 事故の法則^{*}にしばられるもの。

* 一般に信じられているように、事故は偶然や運によって起こるのではない。すべての事故は数学的にコントロールされ、物質世界において、原因と結果の法則（因果律）を通して表現される。エゴの根絶による意識の目覚めによって、事故は防ぐことが可能である。

2 回帰の法則に属するもの。(各転生内で単に繰り返されること)

3 意志―意識によって自主的に決められた行動。

当然、エゴの死によって意志を自由にした人のみはその自由意志から生まれる、新しい行動を実現することができる。

人類の平均的行動は、常に回帰の法則に従って繰り返されているか、または機械的な事故による生産物でしかない。

真に自由意志を持つ人は、新しい環境を作り出すことができ、多くのエゴにビンズめにされた意志を持つ人々は、環境、状況の犠牲者である。

聖書には、透視、予言、奇跡、変身、死人を生き返らせる、息を吹きこんだり、手をあてたり、鼻のつけ根をじっと見つめたりする事による治療等々の高等魔術が記されている。

聖書には、またマッサージ、聖油、磁力のパス(手かざし)、病気の部分に唾液をつける事による治療、他人の考えをずばり読むこと、姿を現わしたり消したり、空から聞こえてくる声など、その例は豊富にある。これらは、自由な解放された意志のなすわざである。

妖術師、呪師、黒魔術師等は、雑草のようにどこにでも数多いものである。

しかし、彼等は、聖人でも、予言者でも、白の友愛結社の一員でもない。

一刻一刻、エゴに死ぬことなく、誰一人として真の悟りに達することはできない。意志―意識の司祭職を実現することさえできない。

多くの人々から我々に「悟りに達するには」、「超能力をつけたい」、「魔法の使い方」などについての問いが届くが、彼らは自己観察をし、自己を知り、エゴに押えつけられた意志、魂を自由にすることには興味も示さない。

この種の人々は失敗する。この種の人々はパワーばかりを望み、エゴの死など頭のスミにも存在しない。

己の間違いを消すこと、それ自体は魔法のようにすばらしい事である。それには、厳格な心理の自己観察が必要である。

「意志」のすばらしい力が自由になった時、奇跡を実現する事ができるのだ。しかし、残念ながら人々は、多数のエゴによって意志をビンズめにされており、したがって意志はエゴの数だけに分割されて、それぞれのエゴのコントロール下に置かれている。

ということは、それぞれのエゴは、それゆえに、その無意識な意志を持つということが明らかであろう。

* 人間の段階から精神的進化を遂げ、高次で働く意識に目覚めた兄弟達の集団を呼ぶ名。彼等の多くは世界の運命を導くために働き、人間を崇高な知識に導くために我々を助ける。
すべての時代の偉大な存在、キリスト、仏陀、モーゼ、ゾロアスター、ペーターベン、モーツァルト、ジャンヌ・ダルクも「白の友愛結社」に属する。

これらの多数の意志は、エゴによって押えつけられ、往々にしてぶつかり合う。それが我々を無力にしたり、弱くしたり、みじめにしたり、情況の犠牲者にする理由である。

第29章 斬首

自己心理に働きかければかけるほど、我々の内部に存在し、我々をいまわし
い者とする、エゴを壊滅する必要性を痛感し、理解することになるだろう。

人生における最悪の状況、最もきわどい状態、最も困難なときにこそ、自分
の内部に潜むこれらのエゴを発見する、すばらしい機会である。

このような逃げかくれできない危機にある時にこそ、思いもしなかった秘密
のエゴ達がしゃしゃり出る。その時、我々が油断なく警戒していれば、当然こ
れらを見ることができる。

反対に人生がまったく穏やかで、何の問題もないという時は、実はエゴを発
見し、それを除外する仕事のためには、あまり望ましくない時である。

しかし、一生のうちには、あまりにも複雑な問題に出合う時があり、そういつ

た時には、往々にして、自分と問題を同一視してしまい、自分自身を完全に見失ってしまう。

そんな時、取りかえしのつかない馬鹿げた事をしてしまうのだ。しかし、その時、注意をしていけば、理性を失うかわりに自己を思い出し、そして自分の中に存在している事さえ想像だにしていなかった、いくつかのエゴを発見して驚愕する。

「自己観察」の意義は、現在はずべての人類の内で、衰退してしまっているが、まじめに働くことにより、一瞬一瞬自己観察をおこなわずに実行すれば、進歩的に発展させることができるだろう。

自己観察を、常時実行することにより、その意味は展開し続け、自分でも想像もしていなかったエゴの存在を、体験として知ることができるようになる。

自己観察によって写し出される、我々内部に住む多数のエゴは、それら一つ一つによって性格づけられる我々の欠点、およびそれに関連する数々の形態の原因であることが判明する。

当然、各エゴのイメージは、それぞれ独特の心理的味を持っていて、それを特徴づける欠点、本性を本能的に習い覚え、手に入れる。

実際どこから始めればいいのか迷ってしまうほどである。自己心理に働きかけなければならぬ必要性をひしひしと感じながら、方向を見失って当惑する。困難の時、不愉快な状況にある時、不利な立場にある時こそ、それらの機会を利用して、自分の内面の動きに注意を払い、その時最も強く現われる欠点、エゴを緊急に見見しなければならぬ。

「怒り」から始めてもよいし、「自尊心」から始めてもよい。または例の「動物的性欲」からでもよい。

真に自分を変えたいと願うなら、日常生活にあつて、自分の心理の動きを観察し、注意することは必要である。

毎晩、眠る前に、その日に起こった出来事を反省するのは、大変良い事である。やっかいな状況にあつてどのような反応をしたか。高笑いで誰かを傷つけたかもしれない。薄笑いや、その場にふさわしからぬ視線によって、誰かにいたたまれない思いをさせたかも知れない。

水は、あるべき場所があれば有益なものだが、洪水になると、同じ水でも被害を与え、有害なものとなる。

火も台所のあるべき場所であれば良いが、あつてはならない場所にまで広が

ると、家具や家を焼き、有害となる。

いかにすばらしい美德でも、それがあつてはならない場であれば有害となる。美德でさえ他人の害ともなり得るのだから、それに応じた、ふさわしい場を心得ることは必要である。

売春宿で、キリストの教えを説く牧師は、何をか言わんや。家に押し入った強盗達が、自分の妻や娘達に乱暴するのを見て、彼等を許すよう神に祈るような温和な男は、何をか言わんや。このように、度を越した寛容さ、隣人のためにつくすのだといって、自分の家に食物を持って帰るかわりに、悪どい物もらいにお金をばらまき、殺人犯のために、ナイフを手に入れてやる世話好きの男は、まったく何をか言わんや、ということだ。

親愛なる読者よ、詩の快い韻律の中にも、罪悪がかくされていることを忘れてはならぬ。悪人の内に、多くの美德があるように、徳の高い貞潔な人の内にも、多くの悪が潜んでいることを。

信じがたいかも知れないが、祈りに充ちた雰囲気の中にさえ、罪悪が隠されている事がある。

罪悪は聖人に変装し、最良の美德を利用し、受難者のように現われ、神聖な

寺院に浸入する。

自己観察の常時使用により、その意味が自己の中で展開するにしたがつて、個人の性格の基礎となるエゴを発見し始める。自分は神経質であるとか、怒りっぽいとか、自尊心過剰であるなどと。

親愛なる読者よ、例え貴方が信じなくとも、我々の気質の裏側には、心理の奥深くに潜む、のろわしい悪魔的創造物さえ存在する。

この種の創造物を見、そして、これらの地獄の怪物の間に、がんじがらめになっている我々の意識を解き放つには、自己観察を怠らず、それを自分の内面で展開させる事で可能になる。

これら、地獄的創造物を壊滅させないうちは、その奥深い所において存在してはならないいまわしい物が、存在し続けることは疑いの余地がない。

ここで最も重症なのは、当人は自分自身がいまわしい存在であることをつゆ知らず、自分は美しく、公正で、善人であり、他人は無理解で、恩知らずで、自分のことをちっとも理解してくれず、自分は他人につくしているのに、返ってくるのは裏切り行為ばかりだ、と嘆くことである。

困難な状況にある時、自己観察によって、予想もしなかったエゴ（心理的欠

点)を明白に気づいている自分を経験するだろう。

日常生活の中で、何が自分を喜ばせ、何が自分を不愉快にさせるか、考えたことがあるだろうか。自分に行動を起こさせる秘密のバネは何であるか、考えたことがあるだろうか。なぜきれいな家を持ちたいか、なぜ、最新型の車を持ちたいか、なぜ最新モードを装っていたいか、自分はどうして強欲な人間なのだろうか、今日一日のうちに、何が最も自分を不愉快にさせたか。今日、何が一番自分の見栄を満たしてくれたか。なぜあの時、誰それに優越感を感じたか。何が自分を他人より優れていると思わせるのか。どうして自分の勝ちほこった過去の歴史を、必要もなしに話しているのか。知人の話を聞きながら一緒になって他人の悪口を言うのを止められなかったのか。儀礼の酒を受け取ったか。タバコを吸わないのに、いやだと言えず、馬鹿にされるのがいやさに無理に吸い始めたではないか。他人との話の中で、真実だけを話したか。いつ、自分で自分に言い訳をするか。いつ自分を自慢するか。何度も話した成功話を、いつも一度繰り返し返すか。自分は虚栄心の固まりであることを理解したか。

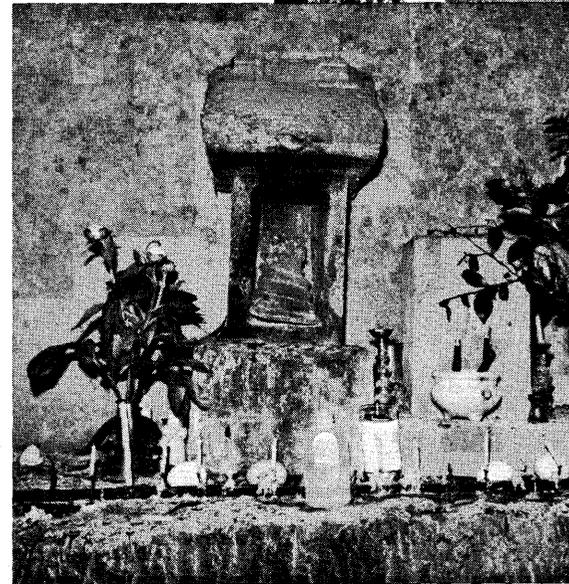
自己観察は、おのれのエゴを見るのみでなく、それに働きかけた結果が、いかに感動的に、そして明確に、自分を変えるかという事実を見ることにも役立つ。

最初は、貴方の性格を特徴づける、これら地獄的創造物、望ましくないこれらの心理的錯誤は、海の底に存在する最も醜い怪物よりも恐ろしく、地球上のジャングルの奥深くに存在する怪物よりも醜い。しかし、この仕事を続けるに従って、つまり自己観察を通して、自分の内部に存在する、例の醜い怪物はだんだん小さくなり、その力を失って行くことを実感するだろう。

そして、これ等の怪物が小さくなり、力を失って行くに従って、その代わりに、子供の時に持っていた、あの美しさを取りもどして行く。そして、怪物を完全に崩壊させた時、怪物が宇宙のチリと化した時に、閉じこめられていた魂は目覚め、自由となり、まぶしいばかりの光を放つのだ。

しかし、マインド(頭)で心理的欠点を崩壊させようとするのでは決してない。見かけだけ欠点に名前をつけ、それを正当化し、一つの位置から、他の場所へ移したりすることはできても、それを根こそぎ絶滅させ、崩壊させることは、マインド(頭)にはできない。

マインドより強い、焰のような力が緊急に必要である。我々の心理的欠点を、宇宙のチリと化することのできる力が。



銭洗弁天

幸運にも、その力は我々の内に存在する「蛇の力」である。これは、昔の錬金術師達が、「ステラ・マリス」(海の聖母)と呼び、ヘルメスの科学で「アゾエ」と謎めいた名で呼ばれた「火の力」であり、古代アステカの「トナンツイン」であり、我々自身の魂の一つの表現である。我々の内にある、母なる神として、神秘的古代文明で、「聖なる蛇」*として表われる。

一つの心理的欠点(エゴ)を充分に観察し、理解した後、我々の宇宙の母であり、魂の母であるこの「クングリニ」**に、それを絶滅させ、崩壊させ、宇宙のチリと化すよう心から願うのである。そうすれば、そのエゴは、少しずつ強さを失い、固い岩が粉になってくずれるように、だんだんと姿を変えていく。

ステラ・マリスは、信じがたいかも知れないが、人間の性エネルギーのアストラル(天界)のシンボルである。

ステラ・マリスは、我々の心理の内部にひそむ怪物達を絶滅する効果的な力を持つことは明らかである。

バプテスマのヨハネの首切りは、我々を考えさせるものだ。首を切ることにしに、ラジカルな心理的变化は不可能である。

我々自身の魂の表現である「トナンツイン」、「ステラ・マリス」は、我々自

* 黄金の蛇、コブラ。我々の内に在り我々を導き守る、聖なる母の象徴。我々に光(叡智)を与える。インドではクングリニ、エジプトではイシス、アステカではトナンツインと呼ばれる。

** サンスクリット語。炎のような力を持つ蛇。この蛇が上昇する時、チャクラを開花させ、最終的にハートにある「父」と合体する。反対に下降すると、恐ろしいほど破壊的になる。(下降する蛇を、クングダバファールと呼ぶ。)

身の底に確実に潜在しているながら、人類に知られないエレクトリックな（電気を帯びた）力であり、明らかに、どのエゴでも絶滅させるために首を切る力を所有する。

ステラ・マリスは、すべての有機体、非有機体の中に潜在する、フィロソファル（靈氣的）な火である。

心理的衝動は、この火の集中的作用を誘発し、そして、エゴ斬首を可能とする。

いくつかのエゴは、この心理的ワークの初期に首を切られ、他は中期、さらに残ったエゴは後期に切られる。

ステラ・マリスは、性能力の力であり、その実行すべき仕事^{ワッ}については、完全なる意識を持つものであるから、エゴの斬首の最適な時期もすべて心得ている。

淫奔、好色、悪口、盗み、ねたみ、不義、金銭欲、嫉妬、虚栄等の心理的醜行すべてが絶滅されないうちは、いかに自分は正直で、責任感が強く、親切で、情深く、美しい心を持つと信じていようが、実際は白い墓石のように、外側は白く光り輝いていようが、内側は腐敗して、むかつくような異臭を放っている。

学界で博学と認められ、西から東から、聖書に関する情報を集め、北から南から、オカルトまがい、エソテリズムまがいの資料を集めたり、書類や資料で証明する確信や、妥協を許さない強情な分派根性を持つたりすることは、実際何の役にも立たない。なぜなら、それらの根底にあるものは、己の地獄的創造物であるエゴ達であり、美しい聖人のような顔をするリーダーの裏にひそむ醜悪な要素を無視しているからである。

我々は自分自身に正直でなければならぬ。

自分は真に何を望んでいるのか。ノーシスの教えを求めるとは、単なる好奇心でしかないのか。

真に望むものが、「斬首」のプロセスを通るものでないのなら、自分自身を瞞していることになる。結局は、自分の内部の腐敗したものを守るべく、偽善行為を行っているのみである。

秘儀を教える数々の学校には、実際、「魂独自の自己実現」を求める、真剣でありながらも、その道をあやまった人が数多い。ということは、彼等は、己の内部の醜いものの絶滅に努めていないからである。

多くの人々は、精神浄化を果たすには、善意の行為を実行することだと考え

ている。しかし、我々自身の内面に尾を引いている、これ等のエゴ、我々に集中的に働きかけをしないうちは、それらの情と、善意に満ちた目の底に、怪物は存在し続けるであろう。

我々は聖人の身なりをした、邪悪な存在であるということを知るべきだ。紳士の服を着ただけのものであり、狼の目をしたかよわい羊であり、聖なる十字の裏に隠れている冷血漢、それが我々である。

寺にあって、敬虔な信者のように見え、誰にも迷惑をかけず、他人から見れば、冷静で、いつも尊敬深く、謙虚であるように見えても、自分自身では、認めることをこぼんでも、あの地獄的創造物、心理の怪物が、未だに存在し続けていることを、よく知っている。

「ノース心理革命」は、ラジカルな変化の必要性を認め、自分自身に、命をかけた、情容赦のない戦いを宣言する時に始まる。

確かに、我々一人一人は、何の価値もない。我々一人一人は、地球の不運であり、のろわしい存在なのだ。

しかし、幸運にも、バプテスマのヨハネが我々に、秘密の道を示してくれた。それは心理的斬首による、エゴの死である。

第30章 永続的重心

我々には真の意味での個性なるものは、存在しない。したがって、意志の連続も不可能なこととなる。

我々の内には、個人なるものは存在せず、多数の人格が住んでいるので、責任ある主格というものが無い以上、人間に意志の持続を期待することは、馬鹿げている。

一人の人間の中に、多数の人間が住んでいることは、我々の周知の事実である。ということは、一人の人間の中に、真の意味での責任態勢は存在しない。

ある時、一つのエゴが、肯定したことを、次の瞬間、もう一つのエゴが、まったく逆の事を肯定しうるために、その意志の重大さを失ってしまふ。

多くの人々は、自分は常に変わることなく、道徳的責任感が強いと信じてい

るが、それは、自己を偽っている事であり、最も救いたいことだ。

ノースの勉強を始める時、人生のどの地点にあるにしろ、希望を持ち、強い意志を持って、自分の存在の意義を見きわめるべく、興奮してこの道への忠誠を誓う人達は数多い。

そして、このような人達を見て、他の人達はその熱意に感嘆さえ感じる。

これほど信心深く、本当に正直なこのような人達の話を知ると、人々は大変感心させられるものである。

しかしながら、この初心は長くは続かない。ある日突然、正当な、または不当な理由で、あるいは単純な、または複雑な理由で、ノースから手を引いていく。そして、自分自身に言い訳をするために、他の神秘主義団体に属し、こちらの方がいいと信じる。

このような人々の往来、すなわち、団体から団体へ、宗派から宗派へと、出たり入ったりするのは、複数エゴ達が、我々の内部で、それぞれ優劣を競っていることに原因する。

それぞれのエゴは、独自の判断力と頭脳と考えを持っているので、このように、団体から団体へ、理想から理想へと移り歩くのは、ごく当然のことである。

このように我々人間は、各エゴの媒体として使われる機械（道具）にすぎないのだ。

神秘エゴ達は、宗教団体を次から次へと移り変わり、神に近づいたと信じこみ、幻の光を輝かせ、すべてを正当化するもの、結局は、そこからもいつか消え失せる。

また、他の人達は、エソテリック・ワークを、ちょっとしたぞき見するだけで、次の瞬間には、他のエゴの誘いに乗って、再び人生の波にのみこまれてしまふ。貴方が、自分の人生に挑戦しないのなら、人生が貴方をのみこむことは明らかだ。人生を戦い続ける人は大変数少ない。我々内部に複数のエゴが存在するうちは、我々の内部に永続的な重心は存在しえないからだ。

したがって、「魂独自の自己実現」を成し得る人達は数少ない。意志の永続なくして、「魂独自の自己実現」は不可能である。自分の内部に、永続的な重心を持つ人は、大変数が少ないので、「魂独自の自己実現」を成し得る人の数も少ないのは当然である。

初めは大変熱心で、遅かれ早かれ熱がさめるといのが、最も普通で、常に働き続け、目的に達するという人は、まったくまれである。

ここで我々は、真実の名において肯定しよう。太陽は複雑かつ、大変困難な実験を行っているという事を。

間違つて「人」と呼ばれる、思考力のある動物の内部には、それが正しく育つた時、太陽人になり得る種が存在する。

しかしながら、この種が育つかどうかは、さだかではない。その大部分は芽も出さず、退化し、残念ながら失われてしまう。

これらの種が我々を「太陽人」に育てるためには、それに適した環境を必要とする。人間の性腺内に置かれた、この真実の種が芽を出すためには、意志の持続と正常な肉体を必要とする。

もし科学者達が、これらの内分泌腺を使った、数々の実験を続けるなら、この「太陽人」に育つ種子の生命力を失わせてしまう可能性がある。

信じがたい事かもしれないが、蟻はすでに、似たようなプロセスを、この地球がまだ若かった遠い昔、通つて来ている。

蟻の住居を見ると、その組織力に驚かされる。どの蟻の巣でも、その秩序と階層のすばらしさに目を見はらせられる。

意識を目覚めさせ、秘儀に通じた人達は、神秘体験によって、それを直接知

ることができる。歴史学者達が、想像もしない遠い昔、現在の蟻達のエッセンスは、人類として、力強い社会主義文明を築いたのである。

彼等は独裁者達を排除し、宗派や、選択の自由等も禁止した。例外なしの全体主義を必要としたからである。

この状況下において、個人の主導性、宗教の権利等を禁止され、理性ある動物は、退化と墮落の道へと落ちて行った。

以上の事実以外にも、人体科学実験、器官移植、内分泌腺移植、ホルモン実験、その他数多くの実験を行い、その結果として彼等は、徐々に小さくなり、形態上の変質をきたし、現在我々が蟻として知る、あの小さな動物に化したのである。

彼らこの文明での、社会的秩序は次第に、機械的なものとなり、それは親から子へと、受け継がれて行った。蟻の巣を見る時、その秩序と組織に驚かされるが、そのインテリジェンスの欠陥には、憐れをもよおされずにはおかない。

もし我々が、自分に働きかけることをしなければ、退化する。そして驚くほど墮落する。

太陽が大自然の実験室の中で行っている実験は、困難なのみでなく、その成

果も大へん少ない。

太陽が太陽人を創る実験は、その種子を持つ人間一人一人が、真実それに協力する時のみ、可能だからである。

しかし、我々の内部に、永続的重心を持たぬかぎり、太陽人の育成は不可能だ。

我々の心理に、重心がなければ、いかにして意志を持続させることができようか。

太陽によって創造された人類の存在目的は、自然の中で、この創造のプログラムと太陽の実験に協力するために他ならない。

もし、太陽がこの実験で、望ましい結果を得られないならば、その創造物への興味を失い、人類は退化と退廃を余儀なくされる。

地球上に現在まで存在した、それぞれの人類は、この太陽の実験に貢献して来た。この人類の中から、太陽は成果として、数少ない太陽人を収穫した。

太陽が各人類の収穫期を終えた時、それらは急激に地球上から姿を消すか、また天変地異によって、終わりを告げる。

太陽人を創るためには、月の力から独立すべく戦うことから始めなければな

らない。我々の心理に住むエゴ達は、明らかに月のものだからである。

我々内部に永続的重心のないうちは、いかにしても、月の力から自由になることは不可能である。

意志の持続なしに、どのようにして、複数エゴを抹殺できるだろうか。そして、心理の中に、永続的重心がないうちは、どのように意志を持続させることができるであろうか。

現在の人類は、月の影響から独立をするかわりに、太陽の知性インテリジェンスへの興味を失い、したがって、自らを退化と退廃へと導いている。

真実の人間が、機械的進化によって生まれることは不可能だ。進化と退化は、大自然の中の創造物すべての軸を成す二つの法則である。決められたある点まで進化し、その後は退化する。登る前には降りる。その逆もしかりである。

我々は、数々の異なったエゴにあやつられるまったくの機械である。そして、大自然の営みに仕えている。エソテリスト magari や、オカルティスト magari の人達が、よく間違っって言うような、個性というものを、我々は持っていない。

可能なかぎり速く、我々は我々の内部で、真の「人」となる種子を育て、収穫の日に備えて準備する必要がある。

意志の持続と、真の意味での道徳的責任感とを持って努めることにより、初めて我々は太陽人に変身することが可能である。つまりそのために、自分自身に働きかけるエソテリック・ワークに、全身全霊を傾けることが必要である。

エソテリック・ワークにおいて、多用性を持つ贅沢はできない。移り気に、今日は心理に働きかけて、明日は人生にのみこまれたり、エソテリック・ワークを止める口実や、理由づけをさがしたりする人々は、退化し、退廃するであろう。

また中には、間違いを正すことを延期する人もいる。経済的にもう少し楽になつたらとか、あとで手がすいてからとか、すべてを明日にまわしてしまう。これらの人々は、太陽の実験が、彼ら個人の判断や、周知の計画とは、まったく異質のものであるということを知らないでいる。

我々が内部に月を持つ間は(エゴは月に属する)、太陽人になることは、たやすいことではない。

地球は二つの月を持つ。二つ目の月はリリット* (Lilith) と呼ばれ、例の白い月よりも、もう少し遠い距離に位置する。

宇宙飛行士達はこのリリットを、レンズ豆に似た形で見ることがよくある。

これは大変小さい黒い月である。

エゴの最も邪悪な力は、リリットから地球へ届き、人間心理において、非人間的、けだもの的な表現をとる。

血なまぐさいニュース、歴史に残る、最も邪悪な集団殺人、想像だにしなかつた罪悪等は、リリットからの振動波に原因する。

人間の中に表現された、月の二重の影響は、その内部に存在するエゴを媒体とし、我々をまったく災いそのものと化す。

この月の二重の力から自由になるため、自分自身の心理に働きかけることを、全身全霊をこめて実行する必要性をまだ理解できないのなら、結局は月にのみこまれてしまうはめになる。そして退化し、退廃し、無意識状態から、さらに下のインフラ意識*の状態へと落ちていく。

ここで重大なのは、我々が、真の個性を持っていないことである。もし、永続的に存在する重心を我々が持つていければ、太陽人になることを成しとげるまで真剣に働くだらう。

この問題で、数多くの弁解、口実、言い訳が存在し、また、数多くの魅力的な誘惑もあり、実際、エソテリック・ワークの重要さを理解する妨げに事欠か

* Lilith ヘブライの民話で、月であり、巨人と悪魔の母とされる。獣的本能のみを持つ。

* 我々の意識の最も低い部分。物事の真実を見ることを妨げるマインドの暗闇。我々の意識の中でもいまいましい、凶悪な部分。

ず、それをほとんど不可能なことにする。

しかしながら、我々の心の内にある、光を求める何かと、ノーシスの実用的応用方法とが、この太陽の実験の目的にそえるよう、我々のささえとなり、基礎となるであろう。

しかし、移り気なマインドはここで我々の言っている意味を理解しない。この章を読み、本を閉じればすぐ忘れる。その後、他の本を読み、その後また別の本を読み、結局は、樂觀的に死後の世界の楽しさを、さも簡単なことのように教える、天国行きのパスポートを売る団体に加盟することになる。

人間とはそういうものである。見えない糸であやつられる、あやつり人形、移り気な機械的人形のように、持続する意志を持たない。

第31章 ノーシスのエソテリック・ワーク(秘儀的仕事)

ノーシスを学び、本書の中で示す真剣に自分に働きかける実用的教えを実生活に応用することは緊急である。

しかしながら、どのようなエゴにしる、まず観察しなければ、それを崩壊に導く仕事を始めることはできない。

観察は我々内部にさしこむ、一条の光のようなものである。

どのようなエゴでも、頭では一つの表現を持ち、心では他の表現を持ち、性においては、また別の表現を持つ。

捕えたエゴは、我々の生体機能の、頭、心、性、これらの三つのセンターで観察する必要がある。

他の人達と席を共にする時も、戦場の見張りのように、警戒を怠らず自己観

察することにより、自分の内的な姿を発見する。

いつ、貴方の虚栄心は傷つけられたか、自尊心はどうか。なぜ、当惑したか。その底に潜む原因は何か。このように、観察、分析せよ。頭、心、性の三つのセンターで。

日常生活は、すばらしい試練の場である。他人との関係や反応の中で、我々内部にひそむエゴ達を発見することができるからである。

何らかの障害、あるいはハプニングが起こった時に、自己観察することにより、自尊心、ねたみ、嫉妬、怒り、強欲、疑惑、中傷、淫乱等々のエゴを発見するに至るのである。

他人を知る前に、自分自身を知る必要がある。客観的な目で自分を見ることを習わなければならない。

他人の立場に我身を置いてみると、気になっていた他人の欠点、実は自分の中にありあまるほど存在していたことに気づく。隣人を愛することは必要である。しかし、このエソテリック・ワークにおいて、他人の身になることを習わなければ、他人を愛することはできない。

残忍性は我々が他人の身になって考えることを知らないうちは、地球上に存

在し続けるであろう。

しかし、自分自身の欠点を直視する勇気のない者が、いかにして他人の身になって考えられるであろうか。

なぜ、他人の欠点ばかりを見なければならぬのか。初めて会った人に、反感を感じるの、我々が他人の身になることを知らない、そして隣人を愛せない、我々の意識があまりにも眠りこけていることを示している。

誰それに反感を感じるが、どうしてだろうか。酒のみだからか。自己観察をしよう。自分の長所はそれほど確かなものだろうか。自分の内部に陶酔のエゴは、本当にないだろうか。

酔っぱらいが、馬鹿げた道化をするのを見て、その中に自分を見、「彼は、自分である。何と馬鹿げたことをしているのだろう。」と言う方がずっと良い。

貴女は正直で善良な女性であり、だからある女性に反感を抱いているのか。なぜ自分の長所を、それ程確かなものと思うのか。貴女の内に、情欲は存在しないと信じるのか。あの女性は信用がおけず、スキヤンダルばかり起こし、好色だから、よこしまな人間であると考えているのか。

常に自己観察をし、深い瞑想の内で、それほど憎む相手の立場に自分を置き

てみる方が、ずっと有益である。

真に我々は自己の内面変化を求めるのなら、ノースのこの心理的ワークの意味を理解し、その価値を見出し、実行に移すことが必要である。

隣人を愛することを知り、自分自身で体験したこの教えを、他人にまで伝えることは重要である。そうしないと、再び利己主義エゴイズムに陥ってしまうことになる。

自己心理に働きかける、エソテリック・ワークを実行していながら、これは自分のためだけのものと考え、他人に伝えることもしないのなら、隣人愛の不足によって、彼の進歩は困難なものとなる。

「与える者は、授かり、より多く与える者は、より多く授かる。しかし何も与えない者は、すでに持っている物まで奪い取られる。」これがこの心理的ワークの法則である。

第32章 心理的ワークにおける祈り

観察、判断(審判)、そして死刑執行。これがエゴ抹殺のための基礎的三段階である。まず第一に、エゴを観察する。第二に、裁判にかけ判決を下す。そして第三に、死刑執行。

戦争の場合も、スパイ達をまず観察し、裁判にかけ、判決を下し、そして銃殺する。

他人との人間関係の中に、エゴ発見、エゴ暴露は存在する。社会における隣人との共同生活を拒否することは、エゴの発見を拒否することである。

まったく無意味に思われるような出来事でも、その原因として、自分の内にある役者、心理の寄生虫であるエゴが存在することは、明らかである。

エゴ発見は、我々が油断なくエゴを観察すべく、アンテナをピンと張った状

態にある時可能になる。

現行犯として捕えられたエゴは、注意深く我々の頭と、心と、性において観察されなければならない。

動物的性欲は、例えば心において、「愛」の表現をとり、頭においては、「理想」の表現をとる事も可能であろう。しかしながら、性におけるその表現に注意を払う時、間違いない病的で、情欲的興奮を感じるであろう。

どのエゴであろうが、エゴは決定的に判断されなければならない。被告席に座らせ、容赦なく判決を下す必要がある。

そして、真にエゴの意味を理解し、我々の心理からそれを除外したいと願うなら、言い訳、口実、理屈、考慮は小さい受け入れるべきではない。

死刑執行は別である。どのエゴにしろ、前もって観察し、判決を下さない限り、死刑執行はできない。

死刑執行、すなわち、エゴのエネルギー溶解のために、この心理的ワークにおける「祈り」は、必要不可欠である。真にエゴを抹殺したいと願うなら、^{マインド}頭より高等な力を、我々は必要とするからである。

マインドのみでは、どのエゴにしても、壊滅させることはできない。これは

反論の余地がない。

「祈り」とは、神と話すことである。我々は一人でいる時、母である神に頼るべきだ。真にエゴを絶滅したいと心から願うならば。母を愛さない、恩知らずな子供では、この自分自身に対する働きかけ（ワーク）は、失敗するであろう。

我々は、一人一人それぞれの聖なる母を持っている。彼女は我々の魂の一つの表現である。

古代民族は、どこでも同じく、我々の精神の奥深くに存在する、母なる神を崇拜した。永遠なる女性的要素は、イシス、聖母マリア、トナンツイン、シベレス、^{レア}、^{アドナイ}、^{観音}等々として表現されている。

この物理的世界において、誰にでも父と母があるように、我々の精神の奥深くに、秘密にまします「父」と、「聖なる母」^{クンダリニ}がある。

天には地上にある人間の数ほど「父」がある。我々の精神の母とは、秘密にまします我々の「父」の女性的形状である。

彼と彼女は我々の精神の高い部分である。彼と彼女は我々の魂、存在そのものであり、心理的エゴ、我を遙かに超えるものである。

* ^{Cibeles} 大地自然の女神。フリギア（小アジアの古国）から始まり、紀元前二〇四年頃に、ローマにも伝わる。マグナ マーテル（Magna mater 神々の母）、偉大な母とも呼ばれる。

* ^{Rhea} ギリシャ神話の古神群に出てくる女神でゼウスの母。ウラノス（天）とゲー（地）の子で、クロノスの姉で妻。

* ^{ヘブライ語で主の意。天使アドナイは高次の指導天使。天}

彼は彼女となり、指揮をし、導き、教える。彼女は絶えまなく自己へ働きかける我々のワークを唯一の条件として、我々内部に存在する望ましくない要素（エゴ）を除去する。

我々が、根本的な「死」に至った時、すなわち、数多くの意識ある試練と、自発的苦難を越え、望ましくない心理的要素をすべて除去した時、その時こそ父・母は一体となり、完全になる。そして我々は、善と悪とを超越した聖なる存在となる。

我々個人の聖なる母は、その焰のようなパワーをもってあらかじめ観察され、判決を下された「我」をどんなものであれ、宇宙の土ほこりとすることができる。

我々の内部にあるこの聖なる母に祈る時、特別な形式があるわけではない。ごく自然に、素直に彼女に請えばよい。子が母に話す時のように。そこには特別な形式はなく、心から湧き出る言葉で話す、ただそれだけだ。

どのようなエゴでも、即時に崩壊することはあり得ない。我々の聖なる母は、一つのエゴを絶滅すべく全力を尽して働き、苦しむのである。

内向的になりなさい、祈りを自分の内に向け、奥深く存在する聖なる母を捜

しなさい。そして誠意ある請願を持って、彼女と話しなさい。あらかじめ注意深く観察し、裁判にかけた例のエゴの絶滅を、彼女に願いなさい。

自己観察を続け、それを展開させるに従って、このエゴ絶滅作戦が、いかに進んで行くかを実感として、立証することであろう。

理解、判断は基礎である。しかし、エゴ絶滅を真に望むのなら、もう一つ必要なものがある。

頭では、どんな欠点でもレッテルを貼ったり、こちらの管轄区から、あちらの管轄へと移動したり、公開したり、かくしたりする事はできる。しかし根本的にそれらを変質させることは、決してできない。

それをするためには、頭以上の特別な力を必要とする。その力は、どんな欠点でも灰と化す、強い焰のような力である。

ステラ・マリス、聖母、我々自身の聖なる母こそが、その力を持って、心理的欠点を灰に化すことができるのである。

聖なる母は我々の肉体や、情愛や、思考を超えた、奥深い所に潜んでいる。彼女は頭の力を遙かに超えた「火の力」である。

我々個人の持つ宇宙の母は、大いなる智慧と愛、そして力を所有する。彼女

には絶対なる完全性が存在する。

善行または善行の持続は、残念ながら何の役にも立たない。どこにも達することがない。いかに毎日「動物的な性欲に負けまい。」と言い続けていても、淫奔、好色のエゴは、我々の心理の底に存在し続けるであろう。

「強欲はもう捨てよう。」と毎日思っても、強欲エゴは、我々の心理の底に、幾多の姿をもって存在する。

いかに俗世界から遠のいて、出家したり、僧院や、仙人のように洞穴に閉じこもっても、己の内にエゴが存在し続けるなら、それは何の役にも立たない。

このような修行者の中には、厳格な訓練で、単期間だけ聖人のような無我の境地に到達し、俗人からすれば、とうてい理解できそうにない物事を、見たり聞いたりする人達がいるが、その心理の内にはエゴが存在し続けるのである。

厳格な絶え間ない修行ののち、魂はエゴから脱して、無我の境地に至ることが可能である。しかしながら、この無我の境地の幸福のあとには、また再び魂は自分の内にもどらなければならぬ。

この無我の境地に慣れた人々は、往々にして、エゴを絶滅することなく、悟りに至ったと早合点し、自分自身をグルー（導師）かマスター（大師）である

と信じこみ、自己催眠のように、精神的退化に深く沈みこんでいく。

無我の境地に至ることが悪いと言うのでは決していない。エゴの存在外にある靈魂は、この上ない幸福感、精神的恍惚を味わう。

ただここで強調したいのは魂の最終的解放のためには、エゴの絶滅しかないということである。

修行をつみ、無我の境地に至ることを繰り返した修行者の魂は、肉体の死後、それを何度か繰り返し返すが、結局はアラジンの魔法のランプの魔人のように、ビンの中、すなわちエゴというビンの中に閉じこめられてしまう。

すると、もう一度肉体を与えられ、またもやその人生を繰り返すべく産まれて来るはめにある。

ヒマラヤや、中央アジアの洞穴の中で死んだ多くの修行僧や仙人の中には、いかにその弟子達が、今だに崇拜しているようにも、現在では見向きもされないような、平凡な俗人の存在であることが多い。

いかに魂の解放を願っても、エゴ絶滅の必要性を考慮に入れなければ、結局は失敗の道をたどるよりほかにないのである。

ノース心理革命

1983年8月15日・第1刷発行（初版 2500部）

定価＝1400円

著者＝サマエル・アウン・ベオール

訳者＝ミチコ アベ デ ネリ

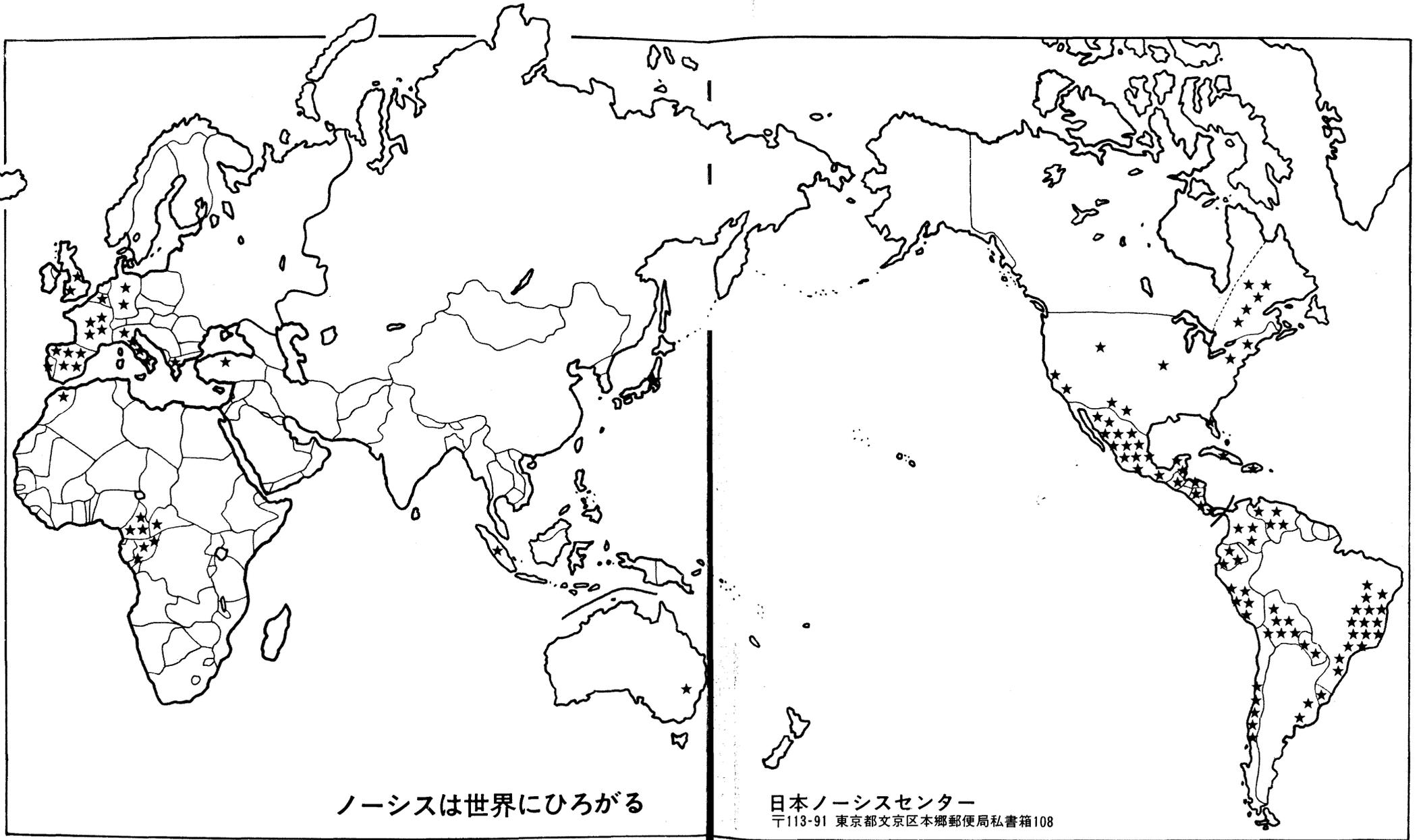
発行所＝株式会社 新泉社

東京都文京区本郷2-15-20

振替・東京7-160936番

電話・(03)812-1662

印刷・K & S 製本・根本製本



ノーシスは世界にひろがる

日本ノーシスセンター
〒113-91 東京都文京区本郷郵便局私書箱108